



筑波大学
University of Tsukuba

Tsukuba Communications

vol.8

2 座談会 「筑波大学のブランディング戦略」
一倉宏氏 × 山田信博学長 他
コピーライター

8 対談 「脳科学から広がる世界」—情報・統計・数理—
甘利俊一氏 × 赤平昌文理事・副学長
(独)理化学研究所
脳科学総合研究センター 特別顧問

14 特集 筑波大学基金

16 学内組織紹介 陸域環境研究センター

18 附属学校紹介 附属桐が丘特別支援学校

20 TSUKUBA SPORTS ライフセービング部

22 TSUKUBA ART & CULTURE 吹奏楽団

24 TOPICS イベント／交流／受賞

28 羽ばたくOB&OG 森川亮氏

30 リレーエッセイ

32 茗溪会Letter

33 紫峰会Letter

34 新聞掲載・テレビ放送一覧

35 イベントカレンダー



座談会

筑波大学をIMAGINEすることから始まる未来 筑波大学のブランディング戦略

本年度のスタートに合わせ、筑波大学のブランディング・プロジェクトが本格化しています。スローガン「IMAGINE THE FUTURE.」の発表、筑波大学基金「TSUKUBA FUTURESHP」のスタート、さらにはメッセージソング「IMAGINE THE FUTURE」の制作開始など、本学卒業生の力をお借りしたプロジェクトです。今回は、学長をはじめプロジェクト関係者にお集まりいただき、プロジェクトの概要やそこに込められた想いなど、率直なご意見を交わしていただきました。

西川 本日は皆さんお忙しいところお集まり下さり、ありがとうございます。特に一倉さんには、今年1月から、ブランディングについて多大なご支援をいただいておりますことにお礼を申し上げます。UI担当ということで、今日は私が進行役を務めます。どうぞよろしくお願い致します。でははじめに、本学が行っていますユニバーシティ・アイデンティティー (UI) 活動と「ブランディング・プロジェクト」のこれまでの経緯を整理しておきたいと思っております(※資料)。山田学長が昨年(2009年)4月の就任時に、「筑波大学のアイデンティティーの確立を目指そう」と表明され、本学の新しいUI活動が始まったと考えてよろしいですね。

山田学長 学長就任にあたり考えていたのは、「現在、

人を育てることが歪んでいるのではないか」ということです。子どもたちは、多様な価値観や多様な能力があり、無限の可能性を持っているのに、「学力」という言葉で閉じ込めているんじゃないだろうか。まずその点をきちっと正さなければいけないということ、学生も教職員も含めて大学全体で理解し、「教育」というものを見つめ直さなくてはならない。そういう方向性を示す中で、「筑波大学のアイデンティティーって何だろう?」ということを考え直してもいいのではないだろうか、と皆さんに申し上げました。

学長になってから教職員の方々と話しをさせてもらって、皆さん、本学の特徴をよくご存知なんですね。大学病院にいたせいもあって、私は皆さんほど理解してい



山田 信博 学長

なかったのかもしれない。しかし、皆さん特徴をよく分かっているのに、それがまとめられ集約されていないし、共有されていない。建学の理念、学際領域の広がり、国際性、筑波連携、筑波の美しい自然環境、

体育・芸術も含めて、広い学問分野の学生たちが一緒に場所で学び合っていること、附属学校をたくさん持っていることなど、学生にも教職員にも、本学にはたくさんの特徴があって、社会に大きな広がりを持っているという認識を深めてほしいと思っています。

一倉さんがお書きになっていた文章にもありましたが、かつて大学は「象牙の塔」だったかも知れませんが、けれども本学は、建学の理念にも書いてあるように、社会に開かれていなければならないし、「象牙の塔」に閉じてもっているのではなくて、我々の価値観や魅力を、社会に対してマニフェストしていくことが大事なのです。それによって、社会からの反応をいただいて、我々もより成長していかなければなりません。

西川 これまでのUI活動の中で、一つのターニングポイントとなったのが、今年1月に開催された「茗溪・筑波グランドフェスティバル」です。ここで学生委員の、山田航平くんが「OBの一倉さんと呼んで、お話しください」と企画、これに原忠信講師も加わっていただき井田仁康教授(学校教育学専攻)の司会でパネルディスカッションが開催されました。山田学長がこれに加わるかたちで、ハッピーな出会いとなった。ここから一気に話が進み、タグラインである「IMAGINE THE FUTURE.」や筑波大学基金「TSUKUBA FUTURESHP」をご提案いただくなど準備をしていきながら、4月から本格的にスタートしたということになります。一倉さんにはこの間、そして今もですが、大きな支援をいただき感謝申し上げます。正直申し上げて、我々はそのスピードについていくのに必死でした(笑)。

一倉 今回のブランディング・プロジェクトにかかわるにあたり、僕も社会人になってずっと、どうして日本の学校教育はこんなに学力偏重なんだろうと、思っていましたし、筑波大学は、そういう日本の教育を突破していく役割も持っていたじゃないか?ということも考えていました。ですから、学長と話中で、筑波大学が日本社会の大切な機関であることを意識しましたし、もちろん母

校愛もあって、お引き受けした次第です。

1月に山田学長とお話をする機会をいただいて以降、トントン拍子で話が進んでいきました。それは偶然ではなく、学長が言われている「イメージを大切にしよう」とか「未来構想大学」という言葉が、もともと建学の理念と共通するものだったから、例えば「IMAGINE THE FUTURE.」という言葉が、僕の中でもすんなり浮かんだのだと思います。僕は1期生で、まさに建学の中で「こんな大学を造るんだ」という言葉と向き合いながら大学生活を送っていました。その建学の理念は「未来構想大学」という言葉に集約しても、決して間違っていないと思います。その意味でも、学長と僕の意識は共通していたし、ブレがなかった。だから、提案をすぐに受け入れていただけたのだと思います。

もう少し具体的に言うと、筑波大学のアイデンティティーって何だろうと考えた時、先ほど山田学長がおっしゃった通り、いいところがたくさんある。そのことを本当に誇りにしていいと思ったし、それを一言に集約できる言葉、そして建学の理念を一言に集約できる言葉を模索する中で、「日本で一番、未来に向けた船の先頭に立つ」というイメージが湧いてきたのです。そのイメージが「IMAGINE THE FUTURE.」「TSUKUBA FUTURESHP」という言葉になりました。



一倉 宏氏

SS22年度 第一学群人文学類卒業
コピーライター/クリエイティブ・ディレクター

生井 広報室の担当として、この間、一倉さんのスピードに合わせてきまして、今は慣れてきて少し落ち着きましたが、3月や4月の慌ただしさはすごかったです(笑)。

一倉 僕は、原さんと具体的なブランディング・プロジェクトを始めたとき「『感性のスピード』を大切にしよう」と話しました。これは広告的発想ですね。広告というのは、非常に凝縮されたコミュニケーションです。テレビ・コマーシャルなら、15秒や30秒で伝えたいことを分かりやすく伝えなくてはいけない。その手法を使いたいと思っています。学外の方に「筑波大学の良さって何なの?」って説明する時に、あれもこれも、たくさん並べても、結局何も伝わらない。ですから、それを集約しイメージ化して伝えることです。デザインであったり、イメージソングであったり、その方が速く伝えることができるということです。シンプルかつイメージ豊かな言葉で伝えることが大切になります。

西川 ドイツの建築家・ミースの言葉でしたか、「Less is more.」というのがあります。まさにその言葉通り、できるだけシンプルに、余計なことは付け加えないということですね。彼の作品は、時間を超越した評価を得ています。



西川 潔 副学長

一倉 プロジェクトの進行スピードは、「感性のスピード」を大事にしたいということと同時に、ある種の勢いみたいなものを大事にした結果でもあります。プロジェクトを始めるにあたって卒業生たちに声をかけたのですが、その勢いや盛り上がりがすごく、僕や原さんがまとめきれないくらい、勢いが出てきています。みんな、この大学で過ごした濃密な時間や体験について、強い思いがあるってことを実感させられます。こういう卒業生の母校愛みたいなものも、ブランディングには大切だと思います。

それから、卒業生として学生たちに伝えたいことがもう一つあります。筑波大学の関係性って濃密で、それは他では得難い経験なんですけど、一方で、その中で少しでも挫折してしまったり疲れたりすると、その濃密な関係を窮屈に感じてしまう場合があります。大学に行く他にやるものがたくさんある都心の大学と違って、濃密な関係性故に、閉じられた空間に感じてしまうというジレンマみたいなものですね。本来は開かれた空間のはずなのに、閉じられている気がしてしまう。その時に、お互いの気持ちを「想像し合う」関係性になってほしいですね。

山田学長 筑波大学のイメージについて学生たちにア

ンケートをすると、「開かれている」と「閉じられている」の両方が出てきます。そこについては、私は医者という立場もあって、一倉さんと同じことを思っていて、「相手の気持ちをIMAGINEする」ということが、とても大切なんです。

西川 ところで山田くんは、今年1月の「茗溪・筑波グランドフェスティバル」で、ゲストに一倉さんをお呼びしたいと発案し、それが結果として非常に大切な役割を果たしたことになるわけですが、なぜ一倉さんをお呼びしたいと思ったのですか？

山田 「茗溪・筑波グランドフェスティバル」は毎回、本学OB・OGや茗溪に縁のある方に来ていただいて講演会をしています。今回、一倉さんをお呼びしたいと思ったのは、「想像力」というキーワードです。一倉さんの本や記事を読んでいると、「想像力」や「イメージ」という言葉がいくつも出てきます。例えば、「言葉はとても不器用なだけども、でも30文字の言葉だけでも、その言葉の表面的なイメージだけじゃなく、その言葉に潜んでいる大きい思いを伝えたい」という一倉さんの言葉に、僕はとても共感してしまい、ぜひお呼びしてお会いしたいと思いました。

西川 原先生は、デザインの現場で活躍し、国際性を身につけている人ということで本学に迎えて間もないのですが、この間、ブランディング・プロジェクトのロゴをはじめとする、デザインなどを担当していただいて、かなり無理をお願いしてご奮闘いただいています。

原 最初に西川先生に大学へ誘っていただいたとき、母校に戻って後輩の学生に教えられるということが、純粋に嬉しかったです。そう思えたのは、学生時代の貴重な体験や、その思い出が強かったからでした。先生と学生の関係の濃さとか、友達との濃密な時間とか。

一倉さんのおっしゃる母校愛ということかも知れません。ですから、僕としては、ブランディング・プロジェクトに深くかかわれることは、とてもありがたいと思っています。みんなの思いが集約されたブランディングが、ちゃんと浸透していってくればいいなあって、強く思います。

学生時代に見えていた大学と、教職員という立場で見える大学と、全然違うわけです。学生のころって、やっぱり受け身の立場にいますよね。教職員は、具体的に大学の運営にかかわっているから受け



身ではいられない。だから、大学側からポンと「ほら、ブランディングだよ」って出されても、学生の立場にすれば、なかなか浸透していかないというのわかるんです。例えば今日のような座談会の場や、あるいはイベントなどを通して、学生たちとも意見交換しながら、少しずつブランディングの思いが伝わっていけばいいと思います。

生井 広報室は一倉さんのスピードに合わせて、これまでにない慌ただしさで進んできました。確かに忙しくて最初は驚くことも多かったのですが、今では非常にやり甲斐を感じています。周りの職員の反応を見ても、やはり斬新な取り組みとして捉えているようです。デザインは素直に「格好いい」と言われますし、学内の編集・発行物にも、スローガンのロゴを使用したいという声も出てきています。

生井 栄 広報室長補佐

西川 新しいスローガンやそのイメージが、教職員の皆さんに好意的に受け入れられることを願っていますが、中には洗練されているが故に、コンサルに丸投げにしていると考えている方もおられるようです。実際は、一倉さんや作曲家の吉川洋一郎さんを中心としたOB・OGの全くのボランティアです。

一倉 今の段階で「IMAGINE THE FUTURE.」って言葉が馴染んでいるかといえば、それはやや突飛なのかもしれません。けれど、ただ「“らしい”言葉だよ」という言葉では、ブランディングとしての志が見えません。この言葉は、先ほどから出ているように建学の理念に沿ったものだし、もともと筑波大学が持っていたアイデンティティーです。その精神がなくなってしまうと、「普通のいい大学」になってしまうと思いますし、だからこそ、この言葉なら、卒業生や現役の学生たちの世代を超えて共有できるアイデンティティーになりうるのではないかと考えています。

山田学長 「大学は国家を強くするためにある」などと言われますが、私はそういう即物的なものじゃないと思うんですよ。日本の大学は、明治時代に富国強兵の一環として、実際に役立つ分野について、「こういう人材が欲しい」という欲求から大学づくりが始まってしまったので、「本当に必要な大学教育とは何だろうか」ということを追求しないままに、今日まで来てしまった部分がある



んです。ですから、皆さんにもこれを機に「大学って何なのだろうか?」ということをご検討してほしいと思っています。

原 大学の機能からすれば「富国強兵」ということも入ってくるかと思いますが、大学で強いブランドを持つということは、機能的価値と同時に、情緒的価値というものも同じくらい必要です。一倉さんがおっしゃっている「感性のスピード」というのも、ある意味で情緒的な価値をどうやってブランドの中に創っていくか、ということでもあると思います。

一倉 学生たちの本音としては、地球や大学の未来より、自分たちの未来に対する不安感が強いだろうと思います。自分の未来が不安なのは、自分たちが出て行く社会のことであり、そこで自分たちが何をできるかであり、そこで働くということが何のためなのか、そうやって生きていくことが有意義なものになるのだろうか、そんなイメージをすることだと思のです。だから、未来を想像することは、学生たちにとって決して関係ないことではないし、格好つけた言葉じゃないんだってことを伝えたい。

原 「IMAGINE THE FUTURE.」をそのまま訳せば、それぞれが「考える」ということになるんですが、未来がどの方向のベクトルに向いていくべきかということについては、やはりみんな考えて、話し合うことが必要になる。その中で、ブランディングが洗練されたり育っていくんじゃないかなと思います。

山田 学生の立場からいうと、最初に「IMAGINE THE FUTURE.」って言葉を提示された時に、あまりにも壮大すぎて実感として捉えられないという意見が多かったです。そこから具体的に何を考えればいいのか分からなかったという意見がありました。ただ、この言葉によって、学生の中で一つのベクトルに向かおうという意識が出



原 忠信 講師 (芸術専攻)



はじめたと思います。そこで今僕が期待しているのは、とにかく学生の方からいろんなアクションを起こしてやること。そしてまとめるのは大学や先生方にお任せしたいと……。

西川 ところで、一般企業と大学のブランディングでは進め方や在り方に違いがあると思いますが、そのあたりはいかがでしょう。

原 大学のブランディングにはステーク・ホルダー（利害関係者）の中での学生の役割が大きいんです。学生というのは、企業でいえば消費者やお客さんということになりますが、大学では「お客さん」という扱いではないですね。確かにお金を払って来ているんだけど、自らプレーヤーであって、大学の世界の中では学生が主役です。だから、学生自身がブランディング化されていかないと、いくら大学側がブランディングの戦略を立てても空虚で中身のものになってしまう。山田くんたちのように学生が中心となって、ブランディングのワークショップを開いたり、学生たちが集まってアクションを起こしていかないと、ブランディングの本質的な動きになっていきません。

一倉 学生たちがお客さんでありながら、大学を卒業したらOBというステーク・ホルダーになるのが大学のブランディングです。学校を卒業して数年経ったら「ああ、そんな大学あったね」と言われるブランドであってほしくない。やっぱり「筑波大学っていいよね」と言われたい。だから、ブランディングをマネジメントする大学側以外にも、ステーク・ホルダーが幅広く存在しているわけです。

山田学長 大学側は、いつでもきちんとブランディングの旗を

示していれば良いと思っています。学生が動く時も、卒業生が振り返ってみる時も、きちんと旗が見えているということが大事だと考えています。

一倉 ブランディングが浸透するまでに時間がかかるのは当然で、メッセージは「感性のスピード」を大事にして送り出しながら、一方でゆっくり育てていく必要もあります。大学はいろんな繋がりがありますから、さまざまな浸透のさせ方があると思います。

西川 大学が企業と違うという点では、大学は外に向けたチャンネルが非常に多いことが挙げられます。スポーツの場があり、学会があり、シンポジウムがあり、学生たちの社会貢献や地域活動があります。企業がたくさんのお金をかけてマスメディアを使って広告を出すのとは、全く違ったメディアやチャンネルですね。例えば、学会の論文発表の際に、パワーポイントの端にいつでもこのロゴが入っているだけで、大学のイメージは違ってきます。そういうさまざまなチャンネルを有効に使って育てていくことは、今後の課題と考えています。

山田 学生の中では、やっぱりブランディングの具体的な展開とか計画だとか、そういうことが見えていないんです。ですから、どう動いていいかわからなかったり、不安になってしまう点があります。今日のお話を聞いて「ブランドは育てるもの」と言わ



山田 航平 さん（教育学類3年）

れて、一概に計画的に考えられるものではないんだと認識できましたが、そういうことすら認識できていないので、ブランディングについての基礎知識みたいなこと



「IMAGINE THE FUTURE」ビジュアルポスター

も、学生に知ってもらう場を提供する必要があるかも知れません。

生井 私たち職員は、学生と違って何十年もこの大学にいる場合があります。長くいることによって、ややもすると帰属意識や愛校精神みたいなものが薄れてきてしまったり、トップダウンで指示があるまで待ってしまったりするわけですが、こうしたアイデンティティーが共有できることで、職員の意識も変わってくると思います。まさにUIなのですが、そういう意味で、学生たちだけでなく、職員たちの中でも盛り上げていかなければならないと、皆さんのお話を聞いて改めて感じます。

山田学長 学生たちは、大学という場をトップダウンの組織と捉えなくていいんです。そんな意識じゃなくて、自分たちでどんどん動いて下さい。むしろ、大学はそれを応援するスタンスでいます。それから、一倉さんや原先生が母校愛と言ってくれたように、卒業生の方たちは、本学への思い入れが強いのかも知れません。その力をぜひ、これからもお借りしたい。もちろん、教職員の意識も大切です。みんなが筑波大学のイメージを共有することがもっとも大切なことです。



西川 学生、教職員、卒業生、修了生のそれぞれが、まず、筑波大学の実績や特質を十分に自覚し、それを伸ばしていくことが大切だと思います。同時に、本学の可能性や未来に取り組む姿勢を、IMAGINE THE FUTURE. にのせて、広く世界に発信していくことが、求められています。ブランディングとは、この一連の活動と理解しております。

本日はさまざまな角度からお話いただき、ありがとうございました。

※資料：筑波ブランディング・プロジェクトの経過

- 2009年 4月 ●山田学長が新学長として就任し「筑波大学のアイデンティティーの確立」を目指すことを表明
●広報戦略室および学長補佐室にて「筑波ブランド」の構築に向けた検討
 - 2010年 1月 ●茗溪・筑波グランドフェスティバルにおいて、山田学長、一倉氏、原講師が「大学のブランディング」について意見交換
 - 2月 ●一倉氏から「筑波大学 ブランディングのために」という企画が提案される。タグライン(キャッチフレーズ)やイメージソングの提供などが提起され、筑波大学への思いの詰まった贈り物として受けとる
 - 3月 ●ブログ「TSUKUBA BRANDING CREWS」を開設し、ブランディング・プロジェクトが進行していく過程を公開
 - 4月 ●山田学長より、本学の内外に対し、ブランディング・プロジェクトの取り組みとともに、スローガン「IMAGINE THE FUTURE.」や筑波大学基金「TSUKUBA FUTURESHIP」の設立を表明
●入学式において新入生にスローガン入りのトートバックやクリアファイルを配布するなど、学生に対してもブランディング・プロジェクトの取り組みを広くアピールする
●学長特別講義が開催され、「IMAGINE THE FUTURE.」、メッセージソング、一倉氏のビデオ・メッセージを披露
同時に、サイネージシステム(学内モニター)やホームページでメッセージソングの放映を開始
 - 5月 ●インターネットを活用したトークライブ「Tsukuba Friday Night Eleven on Twitter」(TFN11)をスタート
●メッセージソングの完成を目指し、その制作への参加希望者を学生から集め、第1回ミーティングを開催
●本学を卒業した後、コピーライター、デザイナーとして活躍している卒業生らがボランティアで集い、「OB・OGミーティング」を開催
 - 6月 ●ブランディングの活用を検討し、Tシャツ制作などを進めるために、紫峰会との連絡協議を開始
- 今後の予定
- 7月 ●一倉氏による、学生に向けたブランディングの説明会を開催
 - 10月 ●学園祭で、メッセージソングに関するイベント、ブランディングのワークショップなどを企画開催



対談

「脳科学から広がる世界」

— 情報・統計・数理 —

甘利 俊一氏 × 赤平 昌文 理事・副学長

独立行政法人 理化学研究所
脳科学総合研究センター 特別顧問

赤平 本日は、脳科学分野で大変ご活躍中の甘利俊一先生にお話をお伺いしたいと思います。ところで、先生は東大工学部出身でいらっしゃると思いますが、当初から脳科学の研究をされていたのですか。

甘利 そうではありません。東大工学部では数理工学といって、数理的な方法を使って世の中の工学現象をはじめ、いろいろな現象を調べていくことに興味を持っていました。そして、大学院を出てから情報処理をしているらしい“脳”に興味を持ちました。しかしその仕組みがさっぱり分からない。もちろん医学の分野ではさまざまな実験装置を使って脳を調べていましたが、理論の眼で脳を見てみたら何が分かるのか、それにとりつかれてしまったのです。

赤平 ちょうど1960年代のころですね。

甘利 1960年代終わりごろです。そのころ、工学の世界では「パーセプトロン(perceptron)」という装置が提案されました。当時のコンピューターで文字を認識するためには、プログラムを書くだけで大変な作業で、どういいうプログラムを書けばいいかも分からない。そこで機械で脳のような装置をつくって、それに学習をさせれば、プログラムではなく、教え込むだけで文字を認識できるようになる。あるいは例題を見せるだけで答えを出せるようになるのではないかということです。そういう仕組みをニューロン(脳の神経細胞)、つまり脳の仕組みをまねて作ってみようという試みです。そうしたパターン認識は、ある意味では統計学においてもあります。普通の確率的手法は、まず確率分布(確率変数のとる値に対して、その値をとる確率の分布状態)があって、それを基に推定します。ところが確率分布型を仮定せずに、例題だけ扱うからノンパラメトリック(注:統計学で、母集団の分布型を仮定しないこと)であると、当時の統計学でもその推論が行われていたのです。

赤平 実際に文字などが判別できる装置ができたのですか。

甘利 それは非常に簡単な作業で、たとえばAとBという文字を、例題を見せるだけで判定するというようなことですね。当時はまだトランジスタがない時代ですから、真空管と、ニューロン間の結合の強さを変えるのに抵抗器を使い、その抵抗を動かすのにモーターを使った。だからとても大きな装置になる。当時、それを実際に作った人もいたのです。ところが1970年代になると、コンピューターの能力が飛躍的に進歩したので、そんなことをするより、ちゃんとプログラムを書いて腕力でやったほうが確実に認識できるのではないかという風潮になってきました。郵便番号の文字認識などは、それなりに成功しました。それで一時、パーセプトロンは廃

れてしまいました。

赤平 しかし、1980年代になってまた脳科学が盛んになってきましたね。

甘利 1980年代、再びパーセプトロンが復活しました。1960年代にコンピューターのプログラムを突き詰めていけば「人工知能」、つまり人間の脳と同じようなものができるという流れと、脳の仕組みをまねしないとできないという流れがあって、1970年代は、いわゆる人工知能派が勝ちます。音声認識とか郵便番号認識とかそれなりにプログラムを書くことでできたのです。ところが1980年代に入ってコンピューターの能力もさらに向上するのですが、認知科学や心理学の人たちが、人間はよく間違えるし錯覚を起こすけれど相対的にはうまくやっつてのける。その仕組みはコンピューターとは全然違うのではないかという論調が出てきて、1980年代にまた脳に戻ってきたのです。

赤平 脳科学に興味を持たれたきっかけは何ですか。

甘利 脳の何が面白いかということ、脳は物質と情報の結節点にあるからです。137億年前にビッグバンが起り、そこで物質とエネルギーが生まれ、その結果としてこの地球ができた。これはいわば、すべて物質とエネルギーの世界です。ところがそこに生命が誕生します。生命はご存知の通り遺伝情報を持っていて、自分と同じものを複製できる能力があります。これは情報が物質を乗っ取ったとも言えるわけです。やがて進化の法則で、偶然の揺らぎでもっと良いものができたら、それがどんどん発展していく。情報と物質にまたがる新しい法則が、この世界をまかり通るようになる。単細胞生物が多細胞生物になって、細胞それぞれの機能が分化していきます。外に手を伸ばして食物を吸収したりする以外に、情報を整理する情報処理の装置が必要になってくる。これが脳です。脳は物質でできているけれども、扱っていることは情報なので、そうした情報の側から脳を調べようというのが私の立場です。

赤平 非常に面白いアプローチですね。そうした時に、心というものはどう関わってくるのでしょうか。

甘利 心は人間の行動を支配しています。その心が何



できているかということ、脳の働きですよ。では、どうして心が出てきたのかということ、人間は弱いから集団で社会生活を送ってきました。そこで共同作業をしなければならない。そのために必要なものが二つあります。一つは言語、そしてもう一つ、自分が何をやるうとするのか自分で知らなければ人にも伝えられません。生命が情報と結合し、進化の法則で脳ができ、そこに心のできたのです。心というのは素晴らしいと同時に、欲望に満ちていますからね。

赤平 人間は学習をしますよね。すると心の持ち方も変わってきますね。

甘利 そうですね。人間は学習をしています。また、同時に社会の文化や文明も学習してほしいのですが、文明というのは興っては滅びの繰り返しです。今の日本も少し危ないかもしれない。脳が単なる1.4kgの物質でできた器官ではなくて、最終的には脳が心を生み、さら



あま り しゅんいち 独立行政法人 理化学研究所
甘利 俊一氏 脳科学総合研究センター 特別顧問

1936年 東京都生まれ
1958年 東京大学工学部応用物理学科卒業
1963年 九州大学助教授
1975年 マサチューセッツ大学客員研究員
1982年 東京大学工学部計数工学科教授
1996年 " 名誉教授
2004年 (独)理化学研究所脳科学総合研究センター長
2009年 (独)理化学研究所特別顧問

主な受賞歴

1992年 IEEE Neural Network Pioneer Award
1995年 日本学士院賞

には文明を形作っていく。脳科学が文明を直接的に解明するわけではありませんが、その物質的基礎については、やっぱり脳科学が明らかにすると考えています。

脳の機能をコンピューターに応用する ニューロコンピューターの可能性

赤平 脳とコンピューターの違いは、何でしょうか。

甘利 数学でも物理学でも推論を立てて、あなればこうなる、こうすればこうなる論理的に考えるわけですが、それを機械化できないかということで、コンピューターができたわけです。論理で物事を推論することは、人間の脳がやっていることですが、人間とコンピューターではまったく方法が違います。まず、コンピューターは情報をコンパクトに記号化して論理演算をする。人間は、いろいろな周囲の状況や記憶、感情などを混ぜ合わせながら考えるわけで、コンピューターのように情報をコンパクトに書いているわけではありません。人間の場合には、ニューロンの数が1000億個あって非常に多いです。ニューロンとニューロンの結合の数はその1万倍ですから、今のコンピューターとは本当にケタ違いです。まず情報をそこにぶちまけて、ニューロン同士がダイナミックに相互作用し、自発的に情報処理をして、全体がうまく協調して最後の答えを出す。つまり並列の処理です。一度にたくさんの情報を分散させておいて、一気に答えを導く。一方、コンピューターはワンステップずつ論理を追っていきます。だからここにコップがあって水が入っているということを認識するのに、とてもたくさんのステップがいるわけです。ところが人間の脳はそれをわずかに5ステップとか非常に少ないステップでできる。ニューロンはコンピューターに比べればものすごく遅いですが、素早く行動ができる。

赤平 それはつまり並列の処理だからですね。

甘利 そうです。論理のステップを減らせて、その代わりに一気に処理してしまうのです。そういう並列の処理は、プログラムではできないですね。だからそこを「学習」させることでやろうということです。

赤平 「学習」というのはどういうことを意味しているのですか。

甘利 脳は、ニューロンという神経細胞できていて、ニューロンとニューロンが無数に繋がっているわけです。そこで何を変えると学習になるのかということ、その結合を変えるのです。ニューロンは繋がっている部分で影響を及ぼし合い、その影響の度合いを強めたり弱めたりすることで学習していく。

赤平 従来のプログラムによるコンピューターとは別に、脳の仕組みをまねた「ニューロコンピューター」^{※1}を作ろうとおっしゃっていますね。

甘利 コンピューターの正統派はプログラムで動くものですが、1ビットの計算をするのにものすごい電流が流れなければなりません。スーパーコンピューターの場合などはそれを動かすためにメガワット級の発電所が必要だと言われたりするほどです。電力の問題、これはひとつの限界です。ところが、生物、ニューロンの場合にはそのパワーが少なく済みます。人間の脳は、結構間違えたりするけれど、動いている画像パターンを見比べて違う点を見つけるとか、感覚的な認識はすごく速い。脳が得意とする部分とコンピューターが本来得意とする部分を共存させていく、そういうコンピューターの方向に技術の流れが行くのではないかと考えています。

赤平 ニューロコンピューターの実現性についてはどうでしょうか。

甘利 まだまだ難しいです。テクノロジーというのは、現実ヒントを得て作るわけですが、必ずしも現実そのものをまねるわけではない。飛行機は鳥に学んだのは事実ですが、実際に飛行機を実現するときには鳥の羽ばたきまではまねることができない。同様に、コンピューターでも脳の仕組みに学ぶけれど、そのハードウェアは何で作るのかということになります。いま使えるもっとも便利なものがトランジスタです。トランジスタは大量生産されているので、コストがとても安い。これを使ってニューロン風の動作をさせるのが早道ではないかというのが現状です。もちろんニューロチップ^{※2}を使ってみたいという強い欲求はあります。

赤平 夢のあるお話ですね。脳の情報処理機能との関係で、人工知能や認知工学は、推論、思考や知識の構造なども問題にしていると思います。演繹的な推論と帰納的な推論の実行について、演繹的な推論はある前提から論理によって進めればできるのですが、帰納的な推論については難しいように思われますが、どうでしょうか。

甘利 その通りですね。たとえば1、3、5、7とくると、大概の人は次は9と答えるでしょうが、その保障はないですよ。次にまた1に戻るかもしれない。そこで一番可能性の高いものを見つけていくというのは、もはや論理ではないかも知れないけれども、問題はどのような枠組みを作るかなのです。ところが人間の場合には、そういうことを考えなくても帰納していますから、ときどき間違えることになる。

赤平 間違えるけれど、学習し最終的には合っていることも多いわけですね。

甘利 人間の場合には、間違えながら学習をしていくのだと思います。学習機能が非常に発達している。コンピューターのために学習のプログラムを書くとなると、学習の状況をすべて設定して、こうなったらこうだということを全部書かないといけません。だから先ほど、ノンパラメトリックということを行いました、人間はそういうフレームワーク(枠組み)が決められていないのに、とりあえず何か行動を起こしてしまうということがあります。最近、機械学習がはやっていますが、機械にどのように学習能力を持たせるのが、ずいぶん議論されるようになってきました。特に必要なのは、データマイニング(大量のデータの中から有用なデータを解析・抽出する技術)で、いまやデータが山のようにあってどうしようもない。そこで機械自身が学習してそのデータの中から、法則性を見つけ出せばいいじゃないかという話です。



あかひら まさひろ
赤平 昌文 理事・副学長(研究)

1971年 早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了
1978年 電気通信大学助教授
1987年 筑波大学数学系教授
1996年 " 数学系長
2006年 日本学術会議連携会員
2007年 筑波大学大学院数理物質科学研究科長
2009年 " 理事・副学長

主な受賞歴
2004年 日本数学会解析学賞
2007年 日本統計学会賞

脳科学とロボット、 心を持つ機械は可能か

赤平 ロボットでは、本学の山海嘉之先生のチームが開発した身体機能拡張ロボットスーツ“HAL”がありますが、これは人間が筋肉を動かすときに脳から発せられる運動ニューロンが神経に伝わってくることを利用して、機械を動かそうというロボットです。ロボットと脳科学はどう関わってくるとお考えでしょうか。

甘利 それはまた大問題。ロボットは今のところプログラムで動いていますが、そこに意識のようなものを持たせることができるのか、極端に言うと心を持たせることができるかが非常に大きな問題です。多くの企業がロボットに取り組みはじめていますが、今の段階ではハードウェアとして、二足歩行や機能として上手く動くことに重点があって、商品化としては、介護やお掃除ロボットまでは、何とかできるだろうという気がします。ただその先のロボットとなると、人間と心を通わせられるように、心を持たせることができるのかどうか。心の定義にもよりますが、原理的に細胞という装置でできている人間に、心が宿ったわけですが、そこには神秘的なものはない。そう考えたときに、細胞ではなくても、トランジスタの脳に心が宿っても不思議ではない、少なくとも心が宿ったように見える装置をつくることではないだろうかと思います。しかし脳という神経回路網の中で、どういう状態で心が存在するようになるのかという研究が、もう少し進まない、ロボットに心を宿すまでにはいかないでしょうね。

赤平 心になると、心理学分野も関係してきますね。

甘利 ここ15～16年の間に、人の脳のどこが働いているのかを測定できる「ファンクショナルMRI」という装置ができて、人間の行動を外から見て分析してきた心理学が、脳の中の仕組みを少しだけ見ることができるようになりました。ここで本当に心理学が実験脳科学と融合したんです。端的な例で言えば、今あなたに5万円あげます、1年待ったら10万円にしてあげますと言われたら、どちらを選ぶのか悩みますよね。このときの脳の働きの過程を、ファンクショナルMRIで脳のどこに血流が集まっているのか見ていくんです。この手法に最近、経済学者も注目して、「ニューロエコノミクス」というのが生まれています。経済学では、世の中の事象を合理的に判断し行動する合理的な人間というのがいて、その行動で経済活動や物価が変動するということでしたが、最近の学説では1人の人間の内部でも葛藤があるように、不合理で葛藤する人間がたくさんいて、社会もそうした葛



藤する人たちの相互作用で経済現象が起こるというように考え直してみようというわけです。そうすると人間の脳を調べなければならないとなってきたわけです。

数理統計学に画期的な 研究アプローチ

赤平 先生は1980年ごろに、数理統計学の世界に微分幾何学^{*3}のアプローチを導入して研究をされていました。当時、我々は数理統計学において解析的に数式を駆使して研究成果を挙げていましたが、先生の場合にはそれを微分幾何の方法で目に見える形で分かりやすく説明されましたね。

甘利 1970年代は神経回路網の数学的な理論を10年くらい夢中でやっていましたが、10年もやるとその分野の専門家になってしまいますね。職人的になりすぎて新しい突飛なものを作れなくなる。そこでテーマを変えて少し別の可能性を試してみた。そのアイデアだけは大学院生のころからあったのですが、情報や統計を幾何の立場で計算できるのではないかと2年間くらい研究に没頭しました。たくさん確率分布があるときに、そのまとまりが真つすぐなのか、実はぐじゃぐじゃなのか、そういう幾何学的な配置というのが実は統計的な推論の効率に利いてくるのではないかということでした。でも統計学の素人がそういうことを考えたので、正直に言えば怖かったのです。そんなときにセミナーで話をする機会があり、赤平さんと竹内啓さん(当時、東京大学教授)が聞きに来て下さっていた。私の説の真贋を見極めにきてくれたのでしょうか(笑)。あれ以来いろいろなことを一緒にできて良かったと思っています。

赤平 あの時は、私にとって画期的なお話でした。すばらしいアイデアでいろいろなことをお話されていたのに驚きました。その後、先生の微分幾何的な方法は世界中の研究者に広まり、かなり注目を浴びましたね。

甘利 最近は統計学の世界だけではなく、要するに確率分布に関する話ですから、画像処理やオペレーションズ・リサーチなどに応用したいと考えています。今夏には、ドイツのライプチヒ、その次にはパリでも情報幾何の国際会議がひらかれ、そこで講演する予定です。

赤平 先生の研究によって数理統計学は非常に豊かなものになったと思います。また、微分幾何を用いたことが「情報幾何」に発展し、純粋数学としての微分幾何学にも影響を与えていますね。

数学と他の理科系学問の溝を埋め、 数理的な思考の体系を再構築すべき

赤平 今後の数理科学、脳科学の課題についてお考えをお聞かせ下さい。

甘利 例えば、記憶という複雑な問題は、いろんなファクターを含んでいます。記憶の要素をそのまま取り出して、脳の中に順々に埋め込んでいくのではなく、いろいろな記憶が混ざり合っています。我々はそれを思い出すときに、一つずつ脳に書かれてあるものを思い出すのではなく、ネットに絡み合っており、ごちゃごちゃしたものの中から必要なものを読み出すという作り出ししてくる。その原理は何なのかを調べてみたいのです。脳の機能を理論で解明しようというときに、現実の脳と同じくらいの100億のニューロンを使って複雑な脳をつくったのでは、やっぱり分からないわけです。理論というのは物事を非常に単純化して本質的なところだけにある切り口で見ることです。物理学などは理論と実験があって、学問の王様だと言われていたけれど、本当に現実と合うかといえば合いません。しかし、それが基本となっていくいろいろなことが分かってくる。つまり脳もそういうことだと思ふのです。脳が数多くの情報を同時に処理するのは、非常にたくさんのニューロンの上に情報を分散して相互作用のダイナミクスで並列に情報を処理していく。今後の脳科学のあり方ですが、できることとできないことがあり、それをなるべく単純なモデルを使って明らかにしていくことです。そして次のステップでその原理を現実の世界で生かそうとするといろんな制約が出て、原理がそのまま現れるわけではない。制約の中にその原理がどんな形で生かされているのかを解明するのが数理脳科学であると考えています。

赤平 これからの数学、数理科学はどうなっていくとお考えですか。

甘利 20世紀の数学は、著しい発展を遂げました。その発展の理由は、抽象化を極限まで進めることでした。それ以前の数学は現実の問題との接点の中から論理を

構築してきた。従って、18~19世紀の数学者は同時に物理学者でもあり、いろんな現実のことをやりながら数学を研究していました。20世紀はそういうことは全部はずして、純粋に論理だけで数学が作れるんだというところに来てしまった。いまの数学はその専門以外の人には歯が立たないところまで来ています。しかし閉じた世界で純粋数学が生き残れるかといえば、そんなことはない。やっぱり現実と交流しながら数学のピークができると思うのです。

いま20年、30年先を見てやってほしいのは、もう一度理科系の学部を再編成して、工学部でいえば電気や機械、土木といった学科区分はなくすこと。そして数学だけが他の理科系の学問と断絶したような体系を無くしていくことです。数学とそれ以外のコンピューター科学なども含めて、大きな層を成すような教育体系を作ってほしいのです。数理科学をすべての学問の中に定着させていくことが必要であると思います。たとえば生命科学に適した数理的な思考の体系は、まだまだ確立されていないと思います。

赤平 最後に、これからの日本を支える科学をつくっていくためのメッセージをお願いします。

甘利 いま、日本の経済全体が落ち目になり、みんな少し焦っているけれど、こういう時こそ、じっくりと学生を鍛えていく必要があると思います。3~4年先に商品化して金儲けができそうだというものばかりを奨励して研究していたら、後に枯渇してしまいます。だから学生がその知的体力をしっかりと身につけられ、大きな夢を持てるような教育にしてほしいし、筑波大学もぜひ頑張ってもらいたいと思います。また、学生諸君は、一時、一つの問題に熱中するのはいいけれど、その職人になってしまっただけでは困るのです。学問をやっていると、つい一直線に深く掘って行って、周りが見えなくなる。それは人間の能力や才能、楽しみを奪ってしまうことだし、もったいないと思います。挫折して隣に移るということではなく、それまでの考え方を生かして、さらに別の分野に発展できる。そういう考えで視野と可能性を広げてほしいと思います。

赤平 本日は有意義なお話をどうもありがとうございました。

※1: 脳を構成する神経細胞(ニューロン)が神経回路網を張り巡らせることで情報処理をすることに着目した、脳の機能を模倣したコンピューターのこと。

※2: 脳の神経回路をモデルにしたニューラル・ネットワークを実行するために開発された専用LSI(集積回路)

※3: 曲線(あるいは曲面や空間など)の問題を微分という手法を用いて研究する分野。微分幾何学は19世紀にガウスの曲面論などを経て、リーマンによって構想され、その後、アインシュタインによる一般相対論の確立に大きな影響を与えた。

TSUKUBA
FUTURESHIP

筑波大学基金
はじまる!

TSUKUBA FUTURESHIP

学長あいさつ

10年後の社会はどのように変化しているのでしょうか。20年後はどうでしょうか。今日の変化のスピード感から察しますと、想像を絶する新しい時代が到来することを予感します。10年後、20年後を予測することは大変に困難なことです。私たち筑波大学は、新しい大学のモデルとして、素早い社会の変化に対応するだけでなく、新しい時代への準備に覚悟をもって臨まなければなりません。それが筑波大学の原点であり、また、未来への針路と考えます。

大学の最も重要な使命は、無限の可能性を持つ若者に、その能力を十分に発揮できるような環境を整備し、10年後、20年後の社会を背負って立つ優秀な人材を各界に送り出すことにあります。その実現への一環として「筑波大学基金 TSUKUBA FUTURESHIP」を設立いたしました。FUTURESHIPは、future=未来とscholarship=奨学金を組み合わせたネーミングです。同時に、大学自体をship=船ととらえ、さながら多くの若人を乗せた「未来船」をイメージしております。

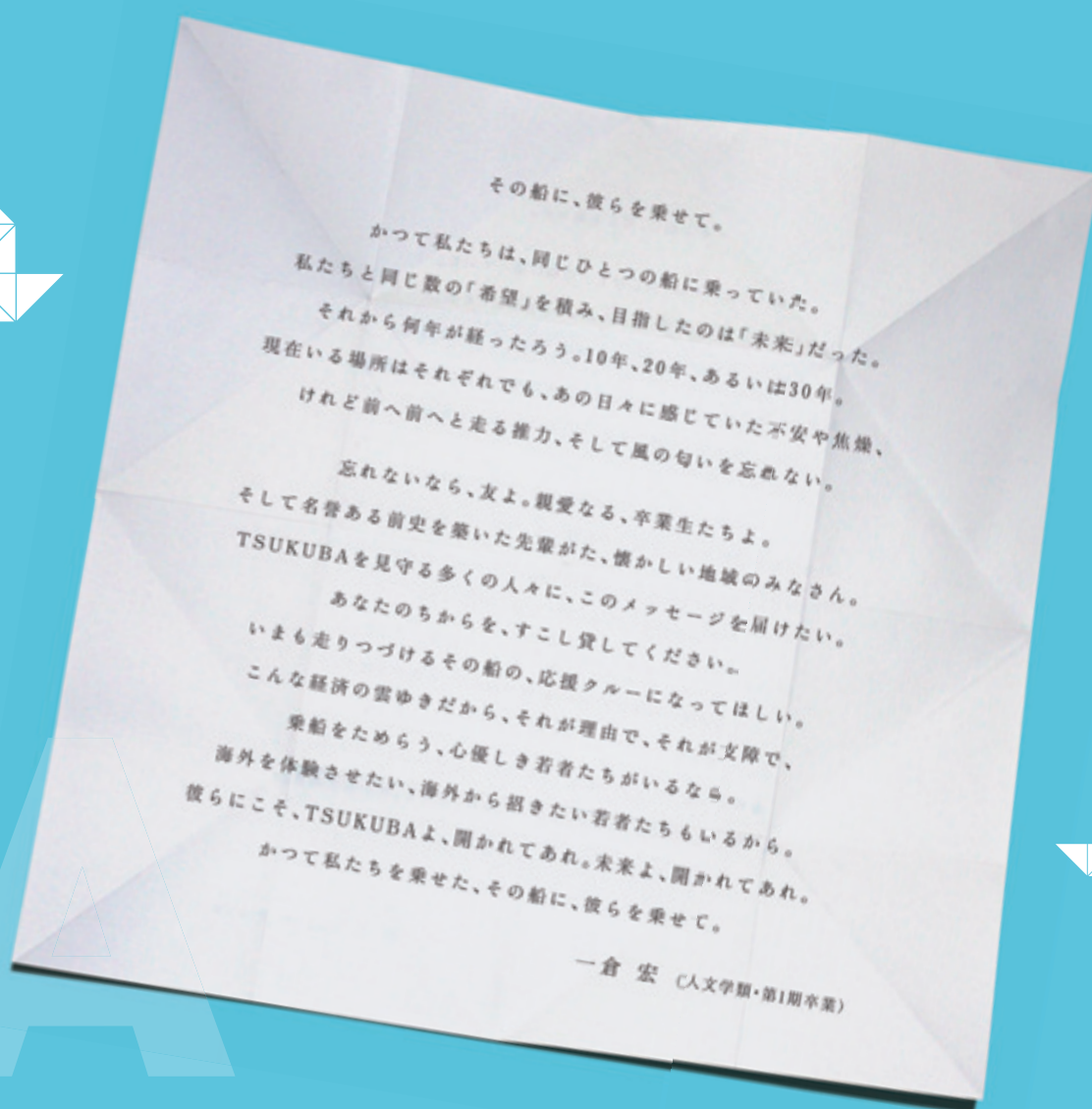
この「筑波大学基金 TSUKUBA FUTURESHIP」に乗った若者たちが、10年後、20年後、さらにその先の社会で活躍するためにも、筑波大学はこれからも「未来志向」の大学として挑戦を続けていくつもりです。皆様におかれましては、私たち筑波大学の決意と使命をご理解いただき、格別のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



筑波大学長
山田 信博

本学は学生への経済的な支援などを目的とした「筑波大学基金 TSUKUBA FUTURESHP」を設立し、4月1日から活動を始めました。基金名は本年度から本格的に動き出したブランディング事業のスローガン「IMAGINE THE FUTURE.」の“FUTURE”とSCHOLARSHIPの“SHIP”を組み合わせた造語で、さながら多くの若者を乗せた「未来船」もイメージしています。教職員の皆様方には、筑波大学基金の趣旨をご理解いただくとともに、基金に対する我々の姿勢を具体的に学外の皆様に明らかにするためにも、多くのご賛同をいただきたく、ご協力をお願いする次第です。

ゆくさきは、未来だ。



筑波大学 基金の概要

- 寄附募集の対象 : 本基金の趣旨にご賛同いただける個人および法人その他各種団体等
- 寄附金の使途 : a. 学生への経済的支援 b. 学生への国際交流支援 c. 学生・団体等への課外活動支援 d. 大学と卒業生の交流支援 e. 附属学校の活動支援
- ご寄附をお願いしたい金額 : 1回1,000円以上をお願いします。
- ご寄附いただいた方へ : 感謝の意をこめて顕彰等を行わせていただきます。
- 目標額 : 100億円

お問合せ お申込み

筑波大学基金事業室 : 〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1 TEL:029-853-2178 FAX:029-853-6020 E-mail:futureship@un.tsukuba.ac.jp
筑波大学基金ホームページ : <https://futureship.sec.tsukuba.ac.jp>

陸域環境研究センター

虹の広場の西側、小道を抜けると丸い草原の真ん中に高い鉄塔がそびえ立ち、小鳥のさえずりも多く聞こえるその場所が、陸域環境研究センターの圃場です。本センターは、この圃場を利用し、熱収支・水収支の観測や隣接する大型水路を使用したさまざまな実験を行い、国内外の研究者と連携して、水・物質・エネルギーの循環を基軸とした陸域環境に関する教育・研究を推進しています。特に、環境問題が注目される中、その重要性はますます高まっており、現在、松岡憲知センター長の下、教員3人、職員2人、準研究員2人、研究員1人で運営に当たっています。



構内図



■熱収支・水収支観測圃場

直径160m(面積20,000㎡)の円形で、多種の雑草が混在する草原となっている圃場内は、高さ30mの気象観測塔、地下水位観測井などの施設のほか、本観測システムのための各種諸測器が配置されています。

1977年以来、地表面における水とエネルギーの流れを定量的に把握するため、気象・水文要素の長期連続観測を実施しています。観測データは無線LANで研究棟に転送され、インターネットで公開しています。研究成果は、地表面改変を含む人間活動が陸域環境に及ぼす影響の解析や、予測する際に役立てられています。

浅沼順准教授は「本センターでは、熱収支・水収支観測をリアルタイムで公開しているほか、林陽生教授(生命環境科学研究科)が、筑波山頂の『筑波山気象観測ステーション』で観測しているさまざまなデータについても、本センターを經由してインターネットはもちろん、TXのつくば駅でも情報発信をしています。また、圃場は、教員と学生が利用しており、熱や水関連の研究以外にも多種な植物が生息しているため、生物学・生態学関連の研究利用や学外の研究者にも広く開放しています」と話しています。



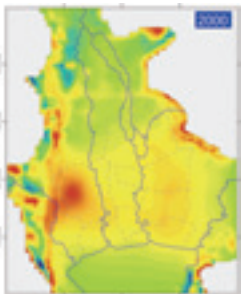
観測塔は高さ30m



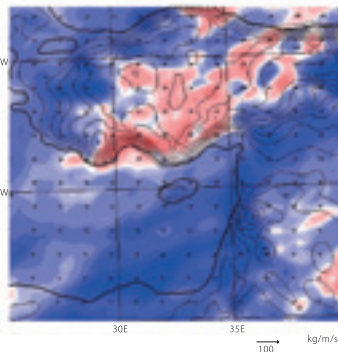
4成分放射計



超音波風速温度計



タイにおける揚水活動に伴う地下水涵養量変化



トルコにおける降水量変化予測



で、東京ディズニーランドと東京ディズニーシーを合わせた面積の約2.4倍の広さを誇ります。広いキャンパスには様々な教育・どのような目的で設置され、どのようなことをしているのかなど、各号で紹介していきます。



■実験水路施設

河川の現象を調べるための大型実験水路や可傾水路、海岸の現象を調べるための二次元造波水路などの実験設備が整備されています。とくに大型実験水路は長さ160m、幅4m、深さ2mと屋内実験水路としては世界最大級で、自然に近いスケールで河川の働きを調べることができます。



造波水槽

このような実験施設を利用して、土砂輸送や地形変化に関する基礎研究を行い、河川や海岸の環境保全や防災対策に役立てられています。

飯島英夫技術専門職員は「科学技術週間での一般の方々への開放日や高校生の見学などで、実際に、長さ160mの大型実験水路に水を流すと、見学者から歓声が上がり、また、興味深く説明を聞く姿が見られます」と話しています。

■陸域環境研究・国際教育協力

所有施設を活用した基礎研究によって得られた知見の実証・応用を目指して、国内外でフィールド調査の実施や数値シミュレーション手法を援用しながら、気候変動や人間活動が陸域環境に及ぼす影響の将来予想・総合的評価を行っています。



ゼロメートル地帯にて(東京)

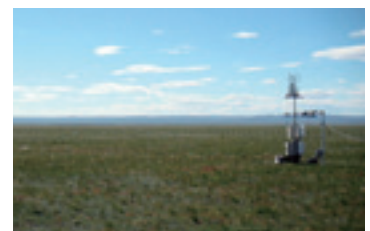
また、文部科学省やユネスコ、アジアパシフィックネットワークなどの委託を受けて、主に開発途上国の研究者、教育者、実務者を対象とした国際研修を実施しています。中国、モンゴル、インドネシア、タイ、チュニジアなどの研究教育機関と学術交流を推進しています。



大行山にて(中国)

■地球環境再生プログラム

松岡センター長は「本センターでは、熱収支・水収支観測圃場と実験水路施設を利用した観測と実験の二本柱に加え、国内外でのプロジェクト研究も積極的に進めています。本年度からは、5年間の予定で、本学の農林技術センターと菅平高原実験センターと協力、信州大学・岐阜大学と連携し、中部山岳地域における3大学の学際的研究体制の中で、気候変動の監視・復元・予測、水循環・生物資源・森林資源・農業資源への影響、下流域の影響などを研究します。本センターでは、気候変動、水循環・炭素循環、土砂輸送にかかわる物質循環、水循環と生態系変動の相互作用などの課題を分担する予定です」と、これからのプロジェクト活動を見据えています。



モンゴルにおける気象観測

「社会に参加し自立を目指す児童・生徒の育成に努める」 筑波大学附属



肢体不自由教育のナショナルセンター校としての歴史

池袋から東京メトロ有楽町線、または副都心線の小竹向原駅から、向原団地内のレンガ道を歩くこと約12分の住宅地(板橋区)に、附属桐が丘特別支援学校はあります。

1952年9月、社会福祉法人日本肢体不自由児協会経営整肢療護園の要請を受けて、東京教育大学附属小学校から2人の講師を派遣し、同園児の教育を開始したことにさかのぼり、肢体不自由の障害を持つ、児童、生徒のための教育機関として、1958年4月、東京教育大学教育学部附属桐が丘養護学校が開校し、2007年4月から現在の校名になりました。2010年6月1日現在、教員数は78人、児童、生徒数124人です。

社会参加に向けての当校の役割

子どもたちの約80%を占める脳性まひをはじめ、抱える障害はさまざまで、ほとんどの子どもたちが車いすで生活しています。子どもたちは、単に肢体の不自由だけではなく、学習や生活する上で、認知面や心理面でのさまざまな困難を抱えています。周りの人々に物理的な介助などを頼まなければならないことも多いので、中には、何事にも人に頼る依存過多な傾向も見受けられます。

このような子どもたちに対して、小学部は「日常生活に必要な基礎・基本の力」、中学部は「日常生活に活用する力」、高等部では「社会生活に応用できる力」を身につけさせ、自立した一人の社会人として、それぞれの個性を生かした社会参加を目指すことを支援しており、卒業後の生活に結び付くように、本校での教育活動が生きる力に結実してほしいと、教員誰もが願っています。

特に「総合」の時間は、さまざまな体験を通し行動力・判断力・協調性を身につけさせ、自らの生活を主体的に設計し具体的に描くことで、社会に出てかかわり合える力を養

うことを目的としています。進路について、特に身近な課題となる高等部では、「総合」の授業時間に、自己の生き方を考えることを大きなテーマに、先輩を招いて進路選択について話を聞いたり、校外学習でコミュニケーションの場を自分たちで企画し体験したり、修学旅行で交流協定を結ぶ韓国の学校を訪問してイベントを計画するなど、数々のプログラムを考えています。

施設併設学級の教育

本校の歴史にあるように、隣接する心身障害児総合医療センター内の「整肢療護園」では、加療中の子どもたちに教育を行う施設併設学級を設置しているのが、大きな特長の一つです。

主に手足の不自由な子どもが、手術やリハビリ(理学療法、作業療法等)を受けるため、「整肢療護園」へ入園しており、その教育を担っています。期間の多くは3~6カ月程度で、転入として受け入れています。転出入者が多いため、担当教員の割り振りを毎週変更しながら授業を実施しており、教員は子どもたちの障害に合わせカリキュラムを編成し、元の学校に戻っても困らないように工夫しながら授業を行っています。

社会への発信

吉沢副校長は「本校では、子どもの示す学習上の困難さを具体的に改善する手立てや指導法の在り方を研究してきました。その成果は、他の肢体不自由の特別支援学校はもとより、障害を持つ児童生徒が在籍する普通学校の先生たちにも、研究協議会などを通じて発信しています。また、子どもたち一人一人に適切な学習環境を整えるために、本校の支援部を中心に、肢体不自由者対応の机やいす、歩行器具などのアドバイスも行っています。今後も、肢体不自由教育のナショナルセンター校として、その使命を果たすべく努力してまいります」と話しています。

それぞれの分野で我が国の教育をリードしています。
個性と障害の実態に応じた教育を行う、附属桐が丘特別支援学校を紹介します。

桐が丘特別支援学校



一人で電車通学を始めたA君。降車駅のホームには駅員さんが待っています。しかしある日、駅員さんがいません!その時ドアが閉まり、電車は発車。困ったA君は、周りの乗客をお願いして次の駅で降りしてもらいました。このような経験を繰り返しながら、生徒たちは大きく成長していきます。

◆中学部「街へ出てみよう」

中学部の生徒は、子どもから大人へ大きく発達成長している時期であり、小学部で培った基礎・基本の力を基に、よりよく問題解決する資質や能力を身につけ、自己理解や他者理解を深め、自己の生き方を考える段階です。そこで、総合の時間を利用して「交通機関の利用」「お金の扱い」「自己理解」「対外的なコミュニケーション」など、毎回テーマに沿って具体的な場面に対峙させ、最後に集大成として、3学期に「池袋へ行ってみよう」という1日を設定しています。自分たちでこの日の池袋周辺の活動を計画させ、グループ行動で実践・検証し、高等部の総合へとつなげています。肢体不自由の子どもたちは、一般に外出経験が少なく、入学時には、電車に乗ったこともなく、信号も渡れない生徒もいます。中学3年間の「総合」や校外学習で自信をつけて、卒業するころには一人での登下校や週末に街に出かけて買い物をしたり、ボランティアさんを頼んで遊ぶなど、行動範囲が大きく広がっていきます。



在学時から車に興味があったK君は、卒業後、障害者職業能力開発校に進み、今春に大手自動車会社Nに就職しました。健常者でもなかなか就職難である昨今の状況で、先生たちは「K君、良くやった!」と喜んでおり、後輩たちにも良い刺激となっています。

◆高等部卒業生の進路状況

	大学	専修学校等	訓練校	就職	投産施設	更生施設	その他	合計
平成17年	3	2	1	0	5	1	0	12
平成18年	3	2	4	0	1	2	1	13
平成19年	1	0	3	0	1	2	2	9
平成20年	3	1	2	0	2	4	1	13
平成21年	5	0	2	0	2	2	1	12

高等部の主な進学先(平成17年度～21年度)
立教大学、駒沢大学、亜細亜大学、東京国際大学、筑波大学、東洋大学、目白大学、浦和大学、東京理科大学、大東文化大学、目白大学、東洋学園大学、放送大学、日本デザイナー学院、東京工学院専門学校、大原情報ビジネス専門学校、大原法律公務員専門学校



進路懇談会

第8回 ライフセービング部

水辺の事故防止に責任と誇り～ライフセーバーに引退なし～



誰もが海辺で安心して、楽しく快適に過ごせるように、事故を未然に防ぎ、安全を見守っている、“海辺の番人”ライフセーバー。「筑波大学ライフセービング部」(久賀圭祐顧問、上原絢子主将・比文3年)は、メンバーや活動に必要な器材も少ない中で、1992年に同好会としてスタートした。地域貢献など地道な活動を進め、2002年に体育会に昇格し、国立大学初のライフセービング部が誕生した。

現在、部員は所属もさまざまな9人。学内の屋内外プールやウエイト場、茨城県鉾田市の大竹海岸が主な練習場所だ。救助活動や訓練、競技に向けた体力・技術を磨くため、日々トレーニングを怠らない。

主な活動は、海岸での監視活動や人命救助、ライフセービング競技会への出場、海岸の美化運動、子どもたちに海での正しい遊び方・安全指導をするなどの普及活動や地域貢献。

新入部員は、日本赤十字社が実施する講習会で心肺蘇生法や応急手当、救助方法などを学び、ライフセーバー資格を取得する。

本学体育会のほかに、大竹海岸を活動拠点とする「大竹サーフ・ライフ・セービング・クラブ」(荒井宏和代表)にも属する同部は、本格的な海水浴シーズンになると、部員全員が同海岸で監視救助活動を中心とした海水

浴場の安全管理、放送、応急手当、迷子の保護、浜辺の美化などの任務を果たす。

シーズンの約30日間は、同海岸のクラブハウスに泊まり込んでの共同生活。時間厳守は重要なルールだ。「一人の活動ではない。チームワークにおいて、時間を守

ことは最低限のルール」だと部員の福塚賢一さん(体育2年)は口元を引き締める。朝6時に朝礼。その日の天候や波の状態も把握し、遊泳区域を定め、8時には監視活動が始まる。赤色と黄色の目立つユニホーム姿で、左右約1km範囲の海岸に設置された4基の監視塔から、広範囲を監視する。人命救助が優先される任務のため、いつでもレスキューに行けるように、体力や器材の準備はベストの状態にしていなければならない。



昨年、初めて監視パトロールに参加した福塚さん。無事故達成記録更新中の同海岸で、“人命救助”“事故防止”の強い重圧に「押しつぶされて、くじけそうになった」こともあった。しかし、つらさを共感し合った仲間たちとチームワークの大切さを学び、信頼と結束が一段と高まり「目の前に助けを求めている人がいたら、手を差し伸べたい。それができなければ、きっと後悔する。この活動はやりがいがある」と、責任と同時に誇りも感じている。今夏も改めて実感する充実の日々を送る。福塚さんは「ライフセーバーに引退はない」と言う。ほとんどの部員が卒業後も活動を



続け、大竹海岸は10年連続無事故(死亡事故ゼロ)達成記録を更新中だ。

海水浴シーズンが終わると、9月からは大会シーズンに入る。競技は、ビーチフラッグスや砂浜を走るなど、瞬発力や持久力を競う「ビーチ競技」、沖のブイまで泳いで戻ってくるサーフレースや長さ3mもあるレスキューボードを利用したボードレースなど、実際の救助器具を使用した「サーフ競技」、プールで溺れている人に見立てた重さ40～50kgのマネキンを素手やチューブで運ぶ「プール競技」など。いずれも救助に必要な技術や瞬時の判断、より迅速で、確実に救助することが求められる。



各種目でトップになった選手は日本代表強化指定選手に選出され、さらに選抜されて日本代表として国際大会に出場する。福塚さんは「サーフスキーレースで全日本選手として、国際大会に出場したい」と目標を語る。



今夏も「安心で安全、楽しい思い出が残る海水浴場」を願い、部員たちは大竹海岸に立つ。

このコーナーは、前身の師範学校から135年以上の歴史を有し、スポーツ分野において、オリンピックの金メダリストを始めとし、優秀な選手を多数輩出している本学の体育会を紹介します。

主な競技成績及び今後の試合日程を紹介しますので、是非、各フィールドに足を運び、熱き声援を送ってください。

【つくばスポーツ ONLINE】ホームページ <http://club.taiiku.tsukuba.ac.jp/>

【筑波大学体育会】ホームページ <http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~taikukai/>

陸上部 [記録・日程]

- 第89回関東学生陸上競技対校選手権大会
【学校対校男子】2位
【男子三段跳】優勝 松下翔一
【男子走り高跳】優勝 戸道直人
【男子200m】2位 安孫子充裕
【男子1600mリレー】優勝 佐藤慧太郎、田中暢人、伊藤森太郎、安孫子充裕
【学校対校女子】優勝 ※18年連続
【女子棒高跳】優勝 榎本優子
【女子砲丸投】優勝 蛭田伶菜
【女子三段跳】優勝 前田和香
【女子ハンマー投】優勝 糸満みや
【女子走り幅跳】優勝 中野瞳
【女子やり投】優勝 宮本理陽子
【女子走り高跳】優勝 金井瞳
【女子円盤投】優勝 高橋亜弓
【女子800m】優勝 真下まなみ 2分04秒95 ※大会新記録
【女子400mリレー】優勝 中野瞳、岡部奈緒、佐野由由実、世古和44秒87 ※関東学生新記録・大会新記録

■天皇賜杯 第79回日本陸上競技対校選手権大会
9/10～12 国立競技場

柔道部 [記録・日程]

- 柔道2010グランプリ・チュニス
【男子73kg級】2位 秋本啓之
【男子90kg級】優勝 小野卓志
■グランドスラム・リオデジャネイロ
【女子78kg級】2位 緒方亜香里
【男子60kg級】優勝 平岡拓晃
【男子73kg級】優勝 秋本啓之

■関東学生柔道大会
【団体男子】優勝 ※5年連続

■関東学生女子柔道体重別選手権大会 9/4 埼玉県武道館

■平成22年度全日本学生柔道体重別選手権大会 10/9～10 日本武道館

バレーボール部 [記録・日程]

- 春季関東大学女子1部バレーボール上位リーグ戦
【女子】2位 敢闘選手賞:渡邊美穂
- 秋季関東大学バレーボールリーグ戦 9/中～10/中旬

ハンドボール部 [記録・日程]

- 関東学生ハンドボール連盟春季リーグ(1部)
【女子】優勝 ※3季ぶり25回目
最優秀選手:作内杏那
優秀選手:石野実加子、青木めぐみ、山野由美子、中西朋世
- 関東学生ハンドボール秋季リーグ戦 8/下～9/下旬

硬式野球部 [記録・日程]

- 首都大学野球春季1部リーグ
2位
ベスト9:野口直哉、佐藤高広、大島建
- 首都大学野球秋季リーグ 9/上～10/下旬 平塚球場他

バスケットボール部 [記録・日程]

- 関東大学選手権
【男子】3位 優秀選手賞、アシスト王:田渡修人
【女子】2位 敢闘賞、リバウンド王:服部直子 ベスト8賞:宮本理沙
- 第86回関東大学バスケットボールリーグ戦 9/4～10/31 代々木第二体育館他

第8回 吹奏楽団

出会いと調和を大切に、音を楽しむ



1977年に創設された「筑波大学吹奏楽団」(森嶋厚行顧問)。現在、103人の音楽好きが所属する大所帯サークルだ。「地域に根差した活動」をモットーに週4回(月・火・金・土曜)、1B棟や文化系サークル会館で、木管、金管、打楽器のパートごとや合奏を繰り返し、仲間と音を調和させながら腕を磨き、熱のこもった練習を行っている。

春と秋の年2回、つくば市・ノバホールでの定期演奏会を活動の中心に置き、年間を通して、地域の保育園や幼稚園、小学校への訪問演奏、少数グループでのアンサンブルコンサートなどの自主企画ステージや、コンクールにも積極的に参加するなど、活動の幅を広げ、同団の音楽をアピールしている。

演奏曲はクラシック、ポップス、ジャズ、オーケストラアレンジなど、さまざまなジャンルにわたる。

「いろんな人やいろんな音に刺激を受けて、出会いを大切にする音楽活動を心掛けたい」と話す、加藤克洋第32期団長(応用理工学類3年)。その象徴ともいえる活動が、春合宿で訪れる新潟県南魚沼市の石打研修所を起点とした、約1週間の演奏旅行だ。同市舞子地区の魚沼吹奏楽団とともに複数の舞台上に立ち、練習の成果を披露しながら交流を深めている。

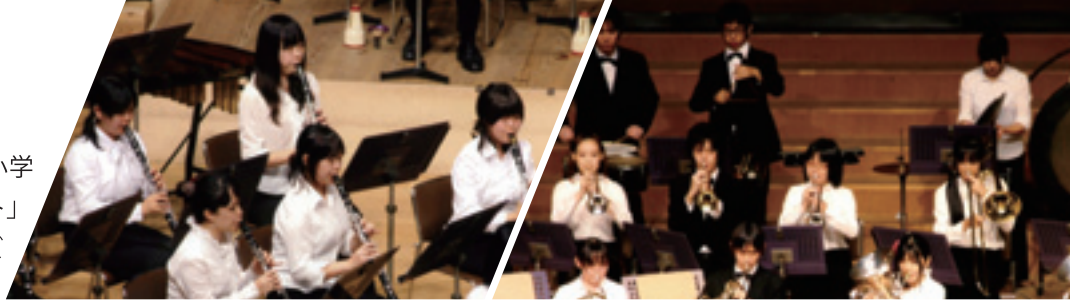


数々のステージで同団コンサートのフィナーレを飾る曲「舞子スプリングマーチ」(1998年)は、魚沼吹奏楽団との友好を記念して、両団共作で、当時の本学吹奏楽団の指導を担当していた作曲家の伊藤康英氏に委嘱し誕生した、大切な一曲だ。同団の演奏会では欠かせない重要なレパートリーになっている。

「お世話になっている魚沼地域の方々に何か恩返し



をしたい」との思いから、地域の小学校を訪問して「のびのびコンサート」も行っている。クラシックやジャズ以外にも、童謡やCM曲など子ども



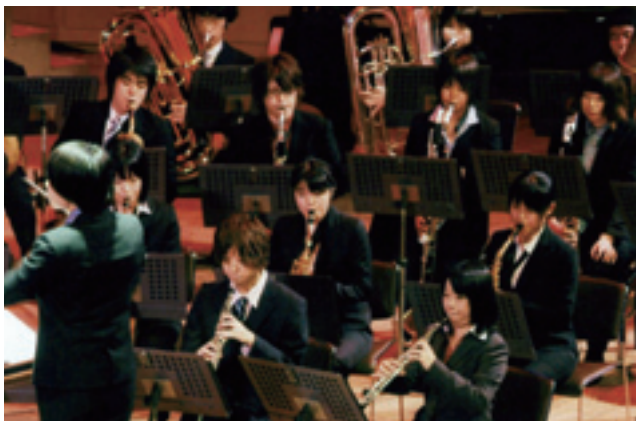
たちも楽しめる親しみやすい音楽をプログラムし、児童に指揮棒を振ってもらう演出も行う。「生の音楽に触れることで、音楽の楽しさを幅広く伝えたい。演奏を喜んでくれる子どもたちに遠征の疲れも癒やされます」と加藤団長は笑顔を見せ、「私たちの音楽は、型にはまることなく、奏者と観客の距離感がぐっと近くなるような演奏を心掛けています。音楽の楽しさが伝わればうれしい。私たちにできる音楽で、交流を図っていきたい」と自信を見せる。

吹奏楽コンクールには団員有志が参加する。昨年は東関東吹奏楽コンクールで銀賞、一昨年は金賞を受賞。東関東ブロック強豪と言われる神奈川大学吹奏楽部を抑え、全国大会出場も見据えている。

「大人数だからこそ、音が1つにまとまる時の喜びは大きい。たくさんの個性を生かした音を創ることができません。コンクール一色の高校部活とは違い、大学の演奏は楽しさが格別です」とパーカッション担当の鈴木美南さん(生物資源学類3年)は同団の魅力を語る。

6月の定期演奏会では、入部して間もない新入生もステージに上がった。秋に予定している第64回定期演奏会では一段と成長した姿が期待できる。加藤団長は会場(ノバホール)を「満席にしたい」と意気込む。

さらなる飛躍を目指し、団員一丸となって、きれいな旋律を奏でる。



このコーナーでは、課外活動として、演奏会や展覧会、各種発表会、またボランティア活動などで、その腕前を披露している、文化系・芸術系サークルの催しを紹介します。

【筑波大学芸術系サークル連合会】ホームページ <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~geisa/>

【筑波大学文化系サークル連合会】ホームページ <http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~bunsa/>

ときめき太鼓塾

7/24 松塚夏祭り [時間] 午後4時~同4時40分
7/31 地域公演 [場所] 土浦市宮大岩田団地
[時間] 午後3時~同3時30分

歌留多部

8/28 第79回全国かるた競技学生選手権大会
8/29 第94回全国職域学生かるた大会【団体戦】

[場所] 江戸川区スポーツセンター

劇団竹蜻蛉

7/10 第162回新人公演『海夕灯(ウナバタノヒ)』 [時間] 午後1時開演
7/11 " [時間] ①午後1時開演
②午後5時開演

[場所] 1E棟102

つくば鳥人間の会

7/24 第33回鳥人間コンテスト選手権大会

[場所] 滋賀県彦根市松原水泳場 琵琶湖東岸

筑波大学混声合唱団

9/18 オータムコンサート

[場所] 大学会館ホール [時間] 午後2時開演

劇団筑波小劇場

7/13 新人公演「Clear Color」 [時間] 午後7時開演
7/14 " [時間] ①午後1時開演
②午後5時開演

[場所] 1E棟102 [料金] 前売り¥100、当日¥150

新田佳浩さん、学長を表敬訪問 「パラリンピック冬季競技大会報告会 新田佳浩君語る」開催

バンクーバーパラリンピックの金メダリストの新田佳浩さん(平成14年度・体育専門学群卒)が4月27日、山田信博学長を表敬訪問しました。

新田さんは、同大会で2つの金メダルを獲得。メダル獲得までの経緯や日本選手団主将としての苦労話、学生時代にトレーニングしていた自然豊かなつくばの環境などを話され、山田学長からは、金メダル獲得のお祝いと労いの言葉が送られるなど、終始、和やかな会談になりました。

新田さんは、その後、5C棟216教室で「パラリンピック冬季競技大会報告会 新田佳浩君語る」

と題した報告会に出席。阿江通良体育専門学群長をはじめ多くの聴講者が集まり、五輪での活躍や今後の期待を込めた盛大な拍手が送られました。



バンクーバーパラリンピック クロカン 男子スプリント 1km立位優勝の新田佳浩選手

写真提供: AFLO SPORT



「環境防災学プログラム」キックオフ・フォーラム開催

「環境防災学プログラム」キックオフ・フォーラムが5月17日、総合研究棟A公開講義室110で開催されました。

このフォーラムは、本年度より生命環境科学研究科に「環境防災学プログラム」が開設されたことを踏まえて開催したもので、東照雄生命環境科学研究科長のあいさつとプログラムの紹介の後、清水一彦副学長、国土交通省河川局砂防部の牧野裕至部長、(財)砂防フロンティア整備推進機構の森俊勇理事長から、祝辞を賜りました。

また、元山古志村村長の長島忠美衆議院議員が「新潟県中越地震からの復興と教訓」と題した基調講演。その後のパネル討論では、西本晴男環境防災学プログラム専任教授の進行のもと「環境防災学の明日を探る」をテーマに、NHKの山崎登解説副委員長、国交省砂防部の牧野部長、(社)全国治水砂防協会の岡本正男理事長から、それぞれの立場から見た環境防災学上の課題について話題提供がなされました。



基調講演を行う長島忠美議員



パネル討論会の様子

ボン事務所開所記念レセプション及びワークショップ開催

ドイツ連邦共和国ボン市で5月19、20日の両日、筑波大学ボン事務所の開所記念行事が行われました。

19日の開所記念レセプション(於:ボン国立博物館)には、ノルトライン・ヴェストファーレン州政府科学技術省のミハエル・ストウクラ次官、ドイツ学術協会のクリスチャン・ボーデ会長、ボン大学のユルゲン・フォーマン学長などの研究・教育機関の要人のほか、日本からは、文部科学省の氷見谷直紀高等教育局国際企画室長、在独日本大使館の西井知紀参事官と山口高志一等書記官らが出席されました。

20日には、日独共通の社会問題として深刻化する高齢化社会への対応に焦点を当てた「高齢化問題への挑戦」というテーマで、ワークショップ(於:ボン科学センター国際会議場)を開催しました。



本学ボン事務所前にて、右から山田学長、塩尻副学長、新井教授、Pohl Martin准教授



ボン科学センター国際会議場でのワークショップ



記念レセプションの様子

嘉納治五郎生誕150周年記念国際シンポジウム開催

嘉納治五郎生誕150周年を記念した国際シンポジウムが6月12日、東京国際フォーラムで開催されました。

当日は、山田信博学長のあいさつ、文部科学省の布村幸彦スポーツ・青少年局長、JOCの竹田恆和会長の祝辞の後、欧州オリンピック委員会パトリック・ヒッキー会長の基調講演や「嘉納治五郎のレガシー:スポーツ、国際交流、教育」と題したシンポジウムなどが行われ、多くの来場者が熱心に耳を傾けました。



パネルディスカッションの様子



山田信博学長のあいさつ



JOCの竹田恆和氏の祝辞



文部科学省の布村幸彦氏の祝辞



熱心に耳を傾ける来場者

交流

4月13日(火) 学長表敬



来訪者:ロシア、東ヨーロッパの国の大学及び高等教育組織(23大学)の代表者一行
目的:日本の大学との交流構築、大学管理、教育水準の改善等に向けた意見交換

5月10日(月) 学長表敬・調印



来訪者:タイ王国 マハーサーラカム大学長一行
目的:学長表敬及び国際交流協定の締結(部局間協定:システム情報工学研究科)

5月27日(木) 学長表敬



来訪者:サウジアラビア王国 プリンセス及びエファット大学長一行
目的:理系・経営分野における本学との大学間協定等についての意見交換

5月28日(金) 副学長表敬



来訪者:中華人民共和国 江南大学長一行
目的:生命環境科学研究科との交流及び意見交換

受賞

●主な受賞等一覧

受賞名	受賞者(所属・学年)	指導・研究室
三田図書館・情報学会学会賞	谷口祥一 教授 (図書館情報メディア研究科 図書館情報メディア専攻)	_____
Gerhard-Ritter-Preis 2009	Christian W.Spang 准教授 (人文社会科学研究科 現代語・現代文化専攻、外国語センター)	_____
2009 International Microprocesses and Nanotechnology Conference. Most Impressive Poster Award	木塚徳志 教授(数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻)	_____
第6回 情報セキュリティ文化賞	岡本栄司 教授(システム情報工学研究科 リスク工学専攻)	_____
第8回 日本NPO学会優秀賞	辻中豊 教授(人文社会科学研究科 国際日本研究専攻)	_____
2009年度日本農業史学会学会賞	湯澤規子 助教 (生命環境科学研究科 国際地縁技術開発科学専攻)	_____
日本二分脊椎・水頭症研究振興財団平成21年度 研究助成	石川栄一 講師 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻、臨床医学系脳神経外科)	_____
第16回 日本金属学会増本量賞	宮崎修一 教授(数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻)	_____
2010 アメリカ白内障屈折矯正手術学会フィルムコンテスト Honorable Mention賞	大鹿哲郎 教授 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻、眼科学分野) 榊原潤 准教授 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻) 加治優一 講師 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻、眼科学分野)	_____
取手駅西口地区まちづくり企画提案大賞(取手市長賞)	小場瀬令二 教授 (システム情報工学研究科 社会システム・マネジメント専攻)	_____
平成22年度 科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞	高橋大介 准教授 (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻、計算科学研究センター) 久保敦 助教(数理物質科学研究科 物理学専攻)	_____

受賞名	受賞者（所属・学年）	指導・研究室
日本化学会 第90春季年会優秀講演賞(学術)	江口美陽 准研究員 (数理物質科学等支援室)	_____
第114回 日本眼科学会総会座長賞	加治優一 講師 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻、眼科学分野)	_____
日本書籍出版協会日本印刷産業連合会 第44回 造本装幀コンクール日本書籍出版協会理事長賞 (自然科学書部門)	磯田正美 准教授 (人間総合科学研究科 学校教育学専攻、教育開発国際協力研究センター) 讃岐勝 研究員 (人間総合科学研究科 人間系、教育開発国際協力研究センター)	_____
財団法人新技術開発財団 第42回 市村学術賞貢献賞	上殿明良 教授 (数理物質科学研究科 電子・物理学専攻)	_____
瑞宝中綬章	内山三郎 名誉教授	_____
社団法人日本都市計画学会 2009年 年間優秀論文賞	鈴木勉 教授 (システム情報工学研究科 リスク工学専攻)	_____
2009年度 文理シナジー学会学術賞	新谷由紀子 准教授 (産学リエゾン共同研究センター)	_____
Outstanding Poster Award of the 49th Annual Meeting of Particle Therapy Co-Operative Group.Scientific Meeting 2010	照沼利之 助手 (人間総合科学研究科 医学、陽子線医学利用研究センター)	櫻井英幸 教授 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻、陽子線医学利用研究センター) 榮武二 教授 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻、陽子線医学利用研究センター) 坪井康次 教授 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻、陽子線医学利用研究センター)
平成22年度 糖尿病学会学会賞「リリー賞」	曾根博仁 教授 (人間総合科学研究科、疾患制御医学専攻、 水戸地域医療教育センター 内分泌代謝・糖尿病内科)	_____
第66回 日本芸術院賞	山本文彦 名誉教授	_____
2010年度 恩賜賞	山本文彦 名誉教授	_____
Humboldt Alumni Award for Innovative Networking Initiatives 2010	新井誠 教授 (ビジネス科学研究科 法曹専攻、法科大学院)	_____
2009 International Microprocesses and Nanotechnology Conference. Most Impressive Poster Award	増田秀樹 (数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士前期課程2年)	木塚徳志 教授 (数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻)
第19回 MRS学術シンポジウム奨励賞	池田飛展 (数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程1年) 猿山雅亮 (数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程3年)	寺西利治 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻)
社団法人情報処理学会創立50周年記念(第72回) 全国大会学生奨励賞	駒水孝裕 (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻 博士前期課程1年) Machdi Imam (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻 博士後期課程3年) 上江まり子 (第二学群 情報学類4年) 大澤 昇平 (第二学群 情報学類4年)	北川博之 教授 (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻) 天笠俊之 准教授 (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻) 川島英之 講師 (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻)
日本計画行政学会関東支部 第4回 若手研究交流会研究発表優秀賞	植野甲史郎 (生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程2年)	_____
第57回 日本生態学会大会(東京大会) ポスター賞(「行動」分野)優秀賞	佐々木那由太 (生命環境科学研究科 生命共存科学専攻 一貫制博士課程2年)	渡辺守 教授 (生命環境科学研究科 生命共存科学専攻)
2009年度 日本鉄鋼協会・日本金属学会奨学賞	児玉智志 (第二学群 工学基礎学類4年)	木塚徳志 教授 (数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻)
つくばエコシティ推進グループ賞2009 最優秀賞 // 優秀賞 // グリーン賞 // グリーン賞 // グリーン賞(2件)	牧瀬翔麻 (社会・国際学群 国際総合学類1年) 金岡孝浩 (人文・文化学群 人文学類1年) 3Ecafeプロジェクトチーム 山本泰弘 (社会・国際学群 国際総合学類4年) 上原拓也 (生命環境学群 生物資源学類3年) イ ハンジョン (理工学群 工学システム学類 特別聴講学生)	_____
2009 地球にやさしい作文・活動報告コンテスト 作文・報告部門 内閣総理大臣賞	池松俊哉 (生命環境学群 生物資源学類3年)	_____
平成21年度 日本内科学会奨励賞	坪井洋人 (人間総合科学研究科 先端応用医学専攻 一貫制博士課程4年)	住田孝之 教授 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻、臨床免疫学)
日本雑草学会第49回大会ベストポスター賞	川崎翔太 (生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 博士前期課程2年)	松本宏 教授 (生命環境科学研究科 生物機能科学専攻)
日本化学会第90春季年会学生講演賞	高野勇太 (数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程3年)	赤阪健 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻、先端学際領域研究センター)
平成22年度 日本原子力学会北関東支部 若手研究者発表会優秀発表賞(学生の部)	細井秀章 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程2年)	吉田啓之 准教授 (筑波大学連携大学院:システム情報工学研究科、構造エネルギー工学専攻)
217th 米国電気化学学会年会学生ポスター賞	佐藤悟 (数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程3年)	赤阪健 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻、先端学際領域研究センター)
日本化学会第90春季年会学生講演賞	猿田雅亮 (数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期課程3年)	寺西利治 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻)
社団法人日本都市計画学会 2009年 年間優秀論文賞	大城将範 (システム情報工学研究科 リスク工学専攻 博士前期課程2年)	_____
2009年度 日本太陽エネルギー学会奨励賞(学生部門)	安田健一郎 (システム情報工学研究科 リスク工学専攻 博士前期課程2年)	岡島敬一 講師 (システム情報工学研究科 リスク工学専攻)
平成22年度 カーリルAPIコンテスト ライブラリアン賞	柿島大貴 (情報学群 知識情報・図書館学類4年)	松村敦 助教 (図書館情報メディア研究科 図書館情報メディア専攻)
情報処理学会創立50周年記念(第72回) 全国大会情報処理学会推奨卒業論文認定	伊藤由梨乃 (図書館情報専門学類4年)	真柴城哲也 准教授 (図書館情報メディア研究科 図書館情報メディア専攻)

※所属、職名、学年は受賞年度

羽ばたく OB&OG



継
続
は
力
な
り
森
川
亮

もり かわ あきら
森川 亮さん
NHN Japan 株式会社
ネイバージャパン株式会社
代表取締役社長

オンラインゲームと検索の事業を展開し、今年、ライブドアがグループに加わった、韓国系IT企業・NHNの日本法人、NHN Japan株式会社社長・森川亮さん(情報学類、89年卒)に、かかわった事業やIT産業のこれからと目標などを、お伺いしました。

プロフィール

1967年 神奈川県生まれ
1989年 筑波大学(第三学群 情報学類 情報工学専攻)卒業
日本テレビ放送網株式会社入社
1999年 青山学院大学大学院国際政治経済学科MBA修了
2000年 ソニー株式会社入社
2003年 ハンゲームジャパン株式会社(現NHN Japan 株式会社)入社
ハンゲーム事業部 事業部長 就任
2004年 取締役就任
2006年 取締役副社長就任
2007年 代表取締役社長就任
" ネイバージャパン株式会社設立に伴い、代表取締役社長就任



©2010 NHN Japan Corporation, All Rights Reserved.



Copyright (c) NAVER



Copyright (c) NAVER

—筑波大学進学の原因と、学生生活をお聞かせ下さい。

入学するまでほとんどコンピューターに触ることなどなかったのですが、これからはこの分野が伸びると思い、情報学類を選びました。建築にも興味があり、入学がちょうど科学万博の年で街が発展していくさまが見られるし、筑波大学は宿舍も含め建物が美しく、そこに惹かれたのも理由の一つです。音楽が好きで、ジャズをメインに、複数の音楽サークルに所属し、午前中は授業にも出ず、松見池で練習していました。つくば市内の外資系会社のパーティーやJAZZ喫茶などで、よく演奏しました。学園祭の水上ステージでの演奏も懐かしいですね。

—就職先決定の経緯をお聞かせ下さい。

先生の勧めより、自分で仕事を見つけたいと思っていました。理系は求人成績順に受けるような流れがあって、それだと自分にはなかなか回ってこない(笑)。音楽にかかわる仕事がやりたくて、大学3年の夏、日本テレビのインターン制度(就業体験)に参加しました。当時は売り手市場だったこともあり、そこですぐに内定をもらいました。

—日本テレビでは、音楽の仕事に携わったのですか

やりたかったのは音楽にかかわる仕事でしたが、専攻がコンピューターだったので、コンピューター関係の部署に配属されました。大学であまり勉強していなかったのが困りましたが、そこから必死に勉強して、いろいろな資格を取り、6年ほどシステム開発の仕事に携わりました。インターネットが出てきたころで、仕事の幅も広がり転職を考えていたら「好きなことをやらせるから残ってほしい」と言われ、会社でインターネット事業をはじめようと、社内にゲリラ的にサーバーを立ち上げ、ダイヤルアップでつながる仕組みやホームページを作成しました。当時はコン

ピューターに詳しい人材が少なかったので、タイミングが良かったのでしょうか。その後5年ほど、衛星放送の会社や海外展開の事業などの新規事業を担当しました。その間に、青山学院大学大学院を修了し、その後、ソニーへ転職。当時、ソニーはVAIO(バイオ)やAIBO(アイボ)などの新事業を進めていて、大きく変わろうとしていました。その中で映画や音楽のコンテンツと端末を結びつけるネットワーク事業を立ち上げるプロジェクトに参加したのですが、途中で止まり、その後ソニーとトヨタと東急の3社共同で始めるブロードバンド事業の立ち上げに3年ほどかかりました。始めた時は10人ほどの会社が、私が辞める時には150人まで成長していました。

—転職に迷いはなかったのですか。

いずれも良い会社でしたが、社会の急速な変化についていけるのかと悩み、小さい会社や産業でも、この先伸びるものならば、自分自身も成長できると、ハンゲームジャパン(現NHN Japan)に転職しました。私は迷ったら新しい方を、そして長期的に見て意味があると思うものを選択しているつもりです。当時、渋谷の雑居ビルで30人ほどの会社でしたが、大企業とは違う家族的な雰囲気には惹かれました。韓国はブロードバンドが進んでいて、すでに新しいビジネスモデルをやっていたから、伸びる確信がありました。今ではグループ全体で約1000人に成長しました。

—NHN Japanの事業内容を教えてください。

今は検索とゲームの事業があります。今年、ライブドアを子会社化し、ポータル事業も加わりましたが、ベースとなっているのが、コミュニティーをベースに利益モデルをつくる手法です。世界的にも新しく、検索の「NAVER」では、グーグルさんやヤフーさんのやり方とは違い、ユーザーと一緒に情報を作る仕組みで検索の精度を高めています。日本でもQ&Aのコミュニティーがありますが、もともとは私たちが、コミュニティーからソーシャル性を高めて立ち上げたサービスです。ゲームに関しては、「ハンゲーム」というポータルサービスを展開しています。最初は韓国のサービスを持ってきていましたが、今はほとんど日本で開発を進めています。アバターという自分のキャラクターを作る仕組みがあり、ゲームの中で着る服や部屋の家具を売るなど、バーチャルの世界でも普段の生活に近い楽しさを提供しています。検索もゲームも、日本に合ったものを作っています。他の外資系企業とは違い、ローカル色を重要視していて、その国に合ったものを、技術を駆使して作っていく、ユニークで先進的な会社です。

—韓国では、検索サイトのトップだと伺いました。

私が入社した時は、韓国の方もまだ大きくありませんでした。もともと検索に関しては、創業者が悩んだ結果、人がほしい情報は、人と人とのコミュニケーションの中にあるということから、それを立ち上げて成功させたんです。韓

国と日本では仕組みが違いますが、ベースは人が作る情報をうまく検索に結び付けるという仕組みです。

—韓国と日本の貴社の違いをお聞かせ下さい。

韓国は国策としてブロードバンドを進めた経緯もあり、大学でもインターネットやITを学ぶことを強化しています。今、本社にはソウル大学院出身者が多く、高いレベルの人材が増えている状況です。技術力が非常に高く、スピードも速い。韓国は変化に強いです。日本の方が圧倒的に技術者が足りないと感じますし、変化に弱い。サッカーが典型的ですが、日本は攻めるよりも守りが得意のようです。韓国人が立ち上げ、それを日本人が磨きあげるといった仕事の流れが結構マッチしているかもしれません。ちなみに、現在の社員平均年齢は32歳。そのうち韓国人が2割ほどです。

—今後の展望や目標をお聞かせ下さい。

検索分野を大きく成長させたいと思っています。現在、検索サービス「NAVER」の利用者は月間約330万人です。目標としてはグーグルさんやヤフーさんと同等のレベルにまで行きたい。ゲームに関しては、市場の世界展開を積極的にやっていきたいです。ライブドアも一緒になりましたし、ポータルでも他社を超えるような、グループ全体として日本でナンバーワンのインターネット企業にしたいと思っています。



—IT産業のこれからと期待することを聞かせて下さい。

当たり前のようにIT化が実現する社会になると思います。韓国は授業や人とのコミュニケーション、買い物にもITを使うなど、インターネットに接している時間が、日本人と比べずごく長く、生活に関するすべてがITと結び付き、世代を超えてさらに進化していくでしょう。そしてその流れは、日本にも現れています。無線LANが広がると、自動車とかいろいろなものがIT化されていくでしょうし、事業展開の芽もあるでしょうね。

—最後に、本学の学生にメッセージをお願いします。

私はデジタルハリウッド大学院で講師もしていますが、昔と比べて学生の勉強スタイルも変わったと感じます。何でも検索してしまえるので、覚えられないんです。それはちょっと怖い気もしますね。筑波大学は当時、周りに何も無いので、勉強に集中できると言われましたが、逆に何も無いから落ち着かず、勉強できないことが多かった(笑)。学生は勉強するために大学に行くのですから、頑張って勉強してほしいです。筑波大学は幅広い学群学類があるので、いろいろな分野の人たちと交流して、社会人になってもその関係を生かしてほしいですね。

リレー エッセイ

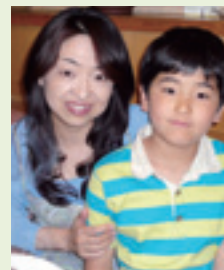
病院総務部経営企画室
池田 一郎さん



夫婦待望の子どもが生まれ、早2年になろうとしています。出産も附属病院でお世話になり、その後も何かとお世話になっています。大学がとても身近であり地域での重要性を感じるどころです。最近まで「りんたく」(附属病院臨時託児所)と一緒に出勤していました。その姿は「ちゃん」と「大五郎」(?)そのものに映ったことでしょうか。今はほかの保育園で元気に頑張っています。ちょっと前まで、サッカーやフットサルをやっていました。今は子どもとボールを蹴るのが夢です。「歌って踊れる職員」を目指して、メタボ解消を頑張りたいと思います。

今回は、生命環境科学等支援室の山本由里子さんです。「ゆりのき保育所開設、子育てなどいろいろお世話になっています。いつもありがとうございます」

研究基盤総合センター
安達 理佳さん



仕事と家事(といっても手抜きだらけですが)に追われる日々の中、楽しみは、週末に家族でちょっとお出かけしたり食事に行ったりすることぐらい。そこで、小学3年生の息子がお気に入りの、家族でよく行くハンバーグの美味しい店を2つ紹介したいと思います。1つ目は「ケイジーン」(牛久市)。フランス料理のお店なので、大人はコース料理を楽しむ事もできます。2つ目は「中台」(土浦市)。ビーフシチューも美味しいです。息子が私と一緒に喜んで出かけてくれるのは、いつまででしょう。きっとあと数年…。それまではこの週末の息抜きを楽しみたいと思っています。

今回は、体育芸術系支援室の山本敦子さんです。「仕事やそれ以外の事もいろいろ相談できる、しっかり者のとても頼りになる先輩です」

附属聴覚特別支援学校
副校長
今井 二郎さん



最近、久しぶりに歌舞伎を見に行きました。改修工事が始まる歌舞伎座ではなく新橋演舞場でしたが、市川猿之助演出の「通し狂言 四谷怪談」を堪能しました。猿之助らしく、宙乗り、トンボありの派手な演出です。社会や歴史を「傾いて」筋書きにした内容、色鮮やかで華やかな舞台、役者の見栄、そして客正規の大向からの掛け声、全てが調和して一つの舞台になっています。私にとっては、都会の文化に触れて、息抜きになるひとときです。若い人にもぜひ一度、「食わず嫌い」に終わらぬよう見ていただきたいものです。

今回は、生命環境科学研究科 生物圏資源科学専攻教授 兼 附属坂戸高等学校長の中村徹さんです。「附属学校教育局での会議の後には、何かとお世話になっています」

農林技術センター
生命環境科学等支援室
山口 和好さん



自分の趣味は、ドライブです。筑波山にドライブに行くことが多いのですが、数年前、筑波サーキットを走りました。走る前は、これぐらいのタイムで走れるだろうと思っていたのですが、いざ走ってみると周りの車とはぶつかりそうになるし、真冬だったにもかかわらず、嫌な冷や汗をびっしょりかいてしまいました。揚げ句に、オイルに乗ってスピンし、自爆しました。修理代のことを考えると、サーキットは大学職員の分際で行ってはいけない所です。

今回は、生命環境科学等支援室の香取伸明さんです。「『結婚できない人達』の一人です。汚れたプライベートを赤裸々に語ってくれるそうです」

研究基盤総合センター(工作部門)
講師

長田 秀治さん

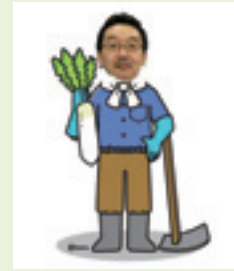


今、写真や登山、サイクリングがはやっていますが、私もはるか昔の20代のころ、このすべてを行っていました。写真は蒸気機関車や旧型の電気機関車を撮るために始め、全国を飛び回っていました。山は、時間があるとな一人で奥多摩をよく歩きました。また、サイクリングは、輪行といって、目的地の近くまで鉄道で行き、そこで自転車を組み立て、遠い所では四国、能登と、いろいろなところを走り回り、わざときつい林道を走ったものです。定年になったらまた自転車で走り回ってみたいのですがどうなるやら。

次回は、生命環境科学等支援室の田所千明さんです。
「木の加工などに詳しい方です」

附属病院薬剤部
副部長

神林 泰行さん



私は婿養子。“マスオさん”をして一年が過ぎた。子どもが一人暮らしを始めると同時に、私たち夫婦も、母一人となった妻の実家へ引っ越した。

勤務先からほど近い地元の集落。

京都、東京と核家族で育った私には、全く無縁だった風習と出合った。組や村親戚ごとの行事、葬儀手伝いなどの参加。困ったことに、そこではハイレベルななまりや、屋号なども飛び交いフリーズ状態!!しかし一年が過ぎてみると、いろんな事に馴染んでくる。近い将来には、“サザエさん”を率いて野菜作りをしている自分がいそう。そんなことを考えながら田舎でマスオ生活を楽しんでいる。

次回は、人間総合科学研究科体育学専攻 准教授の岡田弘隆さんです。
「世界柔道選手権で2階級制覇されたところからの飲み友、そしてファンです。柔道部総監督として活躍されています」

附属図書館情報管理課

篠塚 富士男さん



学生時代に友人たちとお寺に行った時のこと。ある友人が手帳のようなものを取り出して、お寺の方に何やら筆で書いてもらい、ハンコまで押してもらっていました。当時の我々が思いもよらなかったその行動が、シブくもあり、大人という感じもして、強烈な印象を受けました。

これが御朱印との出会いでしたが、それ以来、旅に出る時はなるべく御朱印帳を携えています。あちこちで買った絵ハガキはどこかにいってしまいましたが、御朱印帳はずっと手元にあり、個性的な筆文字や日付を見るたびに、頂いた時の情景が鮮やかに蘇ります。いいものですよ。

次回は人文社会科学研究科 現代語・現代文化専攻准教授の大塚秀明さんです。
「図書館の企画展でいつもお世話になっています。お互い古本好きなので、お会いするといろいろと話が弾みます」

附属学校教育局 学校経理課

落合 祐二さん



東京勤務を命じられて、早2年の月日が流れようとしています。前任(大阪)の時は、好きな野球を毎昼休みに練習していましたが、今では、全くと言っていいほど行えず、所属している文京区の大会には、ぶっつけ本番で出場しています。

それから好きなことといえばゴルフぐらいで、錆びたゴルフクラブが部屋のどこかにしまっているの、たまにはどなたかお誘いのご連絡をいただければ……。さらにスポーツ観戦(もっぱらTV中継ですが)で、野球は巨人、ゴルフは石川遼くん、宮里藍ちゃんの一打一打に注目しております。

次回は、附属学校教育局教授の坪田耕三さんです。
「元附属小学校の先生で、国際教育関係でも尽力を注がれている方です」



本学同窓会組織の茗溪会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

【茗溪会とは】 社団法人茗溪会(西野虎之介理事長)は、筑波大学同窓会を母体とする公益法人で、1882年に設立しました。同会は、筑波大学およびその前身諸学校(東京教育大学、東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校、図書館情報大学など)の卒業生により組織されており、現在の会員数約5万4000人を数え、その6割以上が筑波大学卒業生となっています。

茗溪会助成の学生サークルから活動報告

筑波大学の学生の自主的なサークル活動は、社会貢献活動を目指した活動も多く、茗溪会はこれらの活動を応援しています。昨年度助成したサークル・個人は14件(本誌Vol.5に既報)です。いくつかの団体から、活動の成果報告が届きましたので、そのうちの2団体をご紹介します。(全文は季刊誌『茗溪』2010夏号掲載)

■ 宇宙技術プロジェクト

私たちの活動には、ハイブリッドロケットの製作・打ち上げを目指すロケットプロジェクト、小型衛星製作を目指す衛星プロジェクトの二つがあります。昨年度は、7月にISTS(宇宙技術及び科学の国際シンポジウム)つくば大会及び、8月に秋田県能代市で開催された能代宇宙イベントで、全長2メートル級のハイブリッドロケット3機の打ち上げを行いました。さらなる活動拡大を目指し、本年度より衛星プロジェクトを設立しました。



ロケット打ち上げ実験(秋田県能代市)

■ つくば鳥人間の会

スタジオジブリの映画『魔女の宅急便』では、空にあこがれる「トンボ」という名前の少年が、自転車を改良した「飛行機」で空を「飛ぶ」ことに成功します。私たち、つくば鳥人間の会は「トンボ」が作ったような「飛行機」を、中央図書館下通路で日々作っています。今年の夏は、鳥人間コンテストへの出場も決定し、目下、この大会に向けて頑張っています。9月下旬にはテレビ放映される予定です。



08年琵琶湖「鳥人間コンテスト」にて

学生宿舎で『やどかり祭』

筑波大学学生宿舎で5月28、29日の2日間、「第36回やどかり祭」が行われ、会場は多くの若者たちの熱気に包まれました。28日の前夜祭では、野外ライブやミニステージ大演芸会がにぎやかに開かれ、29日の本祭オープニングには山田信博学長、西川潔副学長を迎え、茗溪会からは鶴巻勝夫理事が出席し、開幕しました。やどかり音楽祭、Dance to Dance、ゆかたコンテストなどのほか、子ども企画や数々の模擬店なども人気を呼び、学生たちは地域と友好を深めながら、祭りの一日を楽しみました。



やどかり祭 オープニング



あいさつする山田信博学長

茗溪学園で教育実習

「茗溪学園中学校高等学校へ教育実習に行つて」

生命環境学群 生物学類 4年 駒形康文

私は5月10日から3週間、茗溪学園中学校高等学校に教育実習に行きました。茗溪学園は筑波大学の協力校ということで、本学から13人、他大学からの卒業生も合わせると24人の実習生がいました。中高一貫校なので、6年単位の独自の進捗で各教科、各教員の工夫された授業が行われており、茗溪学園の進学率の高さにも納得ができました。最初は、教壇に立つのが不安でしたが、親切な先生方と活発な生徒たちの協力によって、無事に終わることができ、本当に良かったです。教育実習を茗溪学園という素晴らしい環境の学校でできたことは、私にとって最高の財産になりました。



教育実習の教室で生徒たちと



本学の父母会組織である紫峰会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

[紫峰会とは] 紫峰会は、筑波大学生の課外活動などを支援するために1977年に設立された学生後援会です。主な事業は課外活動助成事業（援助金の支給など）、学生生活支援事業（緊急貸付金、コピーサービスなど）、広報・普及事業（紫峰会報の発行、UTcollectionの制作・販売など）です。学生の保護者、卒業生とそのご父母の方、教職員など約1万人が入会しています。このコーナーでは、紫峰会が行っている様々な活動を紹介していきます。

■紫峰会援助金と学生財務会議

紫峰会の事業の中でも、課外活動への財政支援は、活動の原点であり最も力を入れている事業です。

●学生財務会議

団体やイベントからの援助金申請は、すべて学生財務会議で審議されます。紫峰会援助金規程に基づき、三系財務局長、全代会担当者により構成され、学生同士の折衝によって援助額や配分基準が作成されています。

①課外活動団体援助金(H22予算額1500~1600万円)

サークルの日常活動に対しての支援で、140の課外活動団体が対象となります。会計担当者が各系財務局に提出している収支計算書の金額を参考に援助金額が算出されます。各団体への支給額は最終的に、系別責任者会議にて決定されていますが、会計担当者ががんばっている団体は、結果的に支給額が多くなる傾向があります。

②特別援助金(H22予算額280万円)

国際交流、地域交流、社会貢献活動を促進することを目的とした援助金で、海外遠征や周年記念事業、大規模な公演やボランティアイベントなどが対象となります。

③課外教育行事援助金(H22予算額400万円)

学内の公式行事などが対象となる援助金で、学園祭、スポーツ・デー、宿舍祭、つくば芸術祭、新歓祭、課外活動団体リーダー研修会などに支給されています。

④記念品特別支給(H22予算額16万円)

課外活動団体が、海外遠征や国内における国際試合に参加する時に、紫峰会が制作している「UTコレクション」が支給され、海外交流に活用されています。

■OBによる援助金エピソード

今の学生からは想像もできないと思いますが、当時（1980年ころ）はパンの耳をかじってでも、お金を切りつめて、課外活動の資金を捻出していた学生も珍しくありませんでした。ですから、紫峰会からの総額約1,000万円の課外活動団体援助金は、多くのサークルに分配するとそれぞれ十数万円の支給となってしまいますが、それでも大変助かったことを記憶しています。

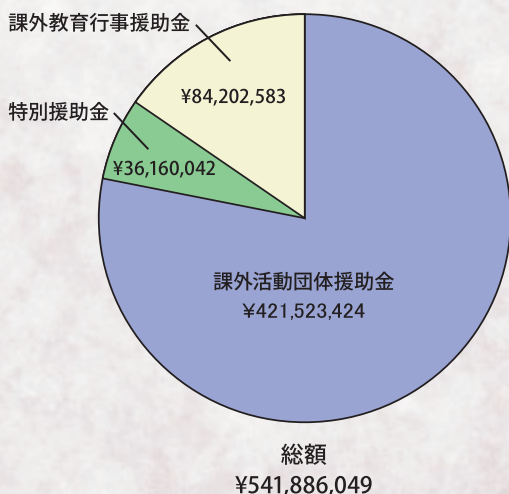
とにかく当時から、紫峰会は我々学生にとって「顔の見える」学生後援会であり、三系からのわがまともいえる紫峰会への期待は大変大きいものでした。紫峰会でもそれに応えるべく、海外遠征などへの「特別援助金」や「課外貸付金」など更なる支援を広げてくれました。そして、時には連綿とした学生生活の流れの継承の場として、また相談役として影から支えてくれました。

(体育会第4代執行委員長 與語靖洋 紫峰会創立20周年記念誌より抜粋)



紫峰会理事(左)から、援助金目録を授与される宿舍祭の清水康成実行委員長

過去32年間に支給した援助金の総額とその内訳



平成21年度課外活動団体援助金支給額ランキング(上位40団体)

順位	サークル名	支給額(円)	順位	サークル名	支給額(円)
1	硬式野球部	1,649,507	21	女子サッカー部	206,550
2	ラグビー部	726,085	22	女子バスケットボール部	200,325
3	管弦楽団	516,231	23	トリアスロン部	195,007
4	舞踏研究会	489,439	24	卓球部	191,055
5	陸上競技部	482,177	25	ELL(筑波軽音楽協会)	183,614
6	医学アイスホッケー部	442,571	26	サッカー同好会	182,565
7	バドミントン同好会	422,673	27	JAZZ愛好会	175,707
8	アメリカンフットボール部	406,146	28	女子ハンドボール部	167,029
9	男子アイスホッケー部	383,297	29	医学ゴルフ部	164,245
10	医学硬式庭球部	358,505	30	合気道部	159,136
11	混声合唱団	357,465	31	津軽三味線倶楽部無絃塾	153,464
12	水泳部	313,038	32	女子バレーボール部	144,337
13	医学バドミントン部	300,916	33	硬式庭球部	141,317
14	海洋研究会	247,279	34	準硬式野球部	140,106
15	フェアリースキークラブ	234,514	35	蹴球部	135,186
16	医学サッカー部	232,647	36	筑波音楽協会	127,492
17	男子バスケットボール部	229,778	37	医学ヨット部	123,296
18	剣道部	226,820	38	医学卓球部	120,640
19	男子ハンドボール部	224,567	39	吹奏楽団	120,220
20	医学スキー部	210,989	40	歌留多部	119,704

平成21年度紫峰会課外活動団体援助金1600万円は、平成22年5~6月に、三系所属のすべての団体に支給されました。

本学関係の主な新聞掲載・テレビ放送一覧(4月～6月)

● 新聞記事一覧

	記事	掲載本学関係者	掲載紙(掲載日)
1	本学第二期中期計画を発表 本学に奨学金創設		茨城(4.2) 常陽(4.4)
2	国際テニス大会、4/5本戦 本学で4/11まで本番前にウェルカムパーティー	山田信博学長 石井靖晃(体育専門学群2年)	朝日(4.5) 常陽(4.5)
3	大子役場軽トラPR屋台に 本学生がデザイン 試食・販売楽しく(蓮見孝教授・大学院芸術系)	蓮見孝教授(人間総合科学研究科)	朝日(4.6)
4	本学で平成22年度入学式 4886人が入学(9学群に2355人、理療科教員養成施設に21人、大学院2510人)	山田信博学長 櫻井智之(社会学類1年) 田上友基(応用理工学類1年) 佐藤翔(応用理工学類1年) 安心院千裕(医学類1年) 中田英輔(工学システム学類1年) 堤智絵(比較文化学類1年)	朝日(4.8) 毎日(4.8) 読売(4.8) 茨城(4.8) 常陽(4.8)
5	本学附属病院が臨床研究の議論議事録をHP公開		朝日(4.10)
6	脱「地味な筑波大」 OB協力ブランド戦略始動 スローガンは「IMAGINE THE FUTURE.」	山田信博学長 一倉宏(卒業生、コピーライター) 原忠信講師(人間総合科学研究科)	朝日(4.13)
7	本学とつくばセキュアネットワークリサーチ(TSNR)がグループ用ソフトを開発 大学内の情報共有支援	つくばセキュアネットワークリサーチ(TSNR) 人文社会科学部	茨城(4.14)
8	▽ラポラボ 探偵団:オットンガエル「5本指」の謎 土岐田昌和助教が研究 武器?解明これから	土岐田昌和助教(生命環境科学研究科)	朝日(4.16)
9	教育関連施設の共同利用 「日本語教育」など8拠点 本学留学生センターが、遠隔地教育による日本語教育活動の拠点到	留学生センター	日刊工業(4.16)
10	最先端研究支援プログラム 本学41億円で2課題	山海嘉之教授(システム情報工学研究科) 柳沢正史教授(筑波大・米テキサス大) 山田信博学長	読売(4.23) 日経(4.23) 東京(4.23) 茨城(4.23) 常陽(4.23) 朝日(5.1)
11	本学出身でバンクーバー五輪・金メダルの新田佳浩選手が、母校に金メダル報告	山田信博学長 新田佳浩(卒業生)	読売(4.28) 茨城(4.28) 朝日(4.29)
12	▽Close Up: 霞ヶ浦汚染 排ガス物質が原因か 本学教授ら研究成果まとめる	福島武彦教授(生命環境科学研究科) 恩田裕一教授(生命環境科学研究科)	常陽(4.30)
13	本学の学生宿舎、「今風」に 開学以来初の大規模改装 TX開通で通学生増加 入居希望は減る傾向	学生部 土屋結実(生物学類1年) 長友亘(生物学類3年)	朝日(5.7)
14	5/14にチュニジアで第1回日本・北アフリカ学長会議 本学など40機関が一堂に	山田信博学長 江崎玲於奈元学長	常陽(5.13)
15	アオコ増殖の条件解明に本学と京大・福井県立大がプロジェクト 浄化対策、データで効果的に 海外湖沼まで見据え研究	渡邊信教授(生命環境科学研究科)	日刊工業(5.17)
16	6/11開幕のサッカーW杯2010 薄い空気、伸びるシュート 標高1000m超、平地とボール2個分揺れる魔域に注目本学の浅井武教授が分析	浅井武教授(人間総合科学研究科) 本学大学院サッカーコーチング研究室	東京(5.17) 産経(5.28) 朝日(6.1, 6.4夕) 毎日(6.8夕)
17	「3Eカフェ」温暖化情報虚実を迫る 学生、市民、専門家ら環境問題で議論	3Eカフェ・プロジェクトチーム 忽那一平(医学類6年) 羽田野真由美(生物資源学類4年)	茨城(5.19)
18	「ハンズオンリーCPR(心肺蘇生法)」講習会 つくば市民40人が蘇生法学ぶ	安田貢講師(人間総合科学研究科)	茨城(5.20)
19	「つくばシンポジウム」で未来の都市像探る意見交換	山田信博学長 つくば3Eフォーラム	茨城(5.25) 常陽(5.25)
20	取手市貝塚で「いもりの里」事業スタート 谷津田復活させ養殖を 本学大学院と取手市などが協力	千葉親文准教授(生命環境科学研究科)	毎日(5.26)
21	本学と東大チームが、未分化肝細胞を立体的に培養する方法を開発 3週間の生育に成功 製薬試験に活用	長崎幸夫教授(数理物質科学研究科)	日経産業(5.31)
22	伊藤純郎教授と教え子が茨城県内に残る戦争遺跡の調査結果を出版 戦争遺跡を「歴史教材に」授業での活用訴え	伊藤純郎教授(人文社会科学部) 小田真代(卒業生、茨城キリスト教学園高教諭)	朝日(6.2)
23	文科省が五輪メダル増産のための競技力向上支援団体に、本学を選定		スポ報知(6.1) 産経(6.2, 6.3)
24	澁谷教授ら研究グループがアレルギー-症状抑制分子発見	澁谷彰教授(人間総合科学研究科) 田原聡子助教(人間総合科学研究科)	NHKweb(6.7) 朝日(6.7夕) 毎日(6.7夕) 読売(6.7夕) 日経(6.7夕) 東京(6.7夕) 産経(6.8) 茨城(6.8) 常陽(6.8)
25	▽科学のまちから:筑波大学大学院システム情報工学研究科 個人に合った体重管理	システム情報工学研究科 中内靖准教授(システム情報工学研究科) 加藤義隆(システム情報工学研究科 博士前期課程1年) 保尾奈緒子(卒業生)	毎日(6.8)

● テレビ放送一覧

	内容	出演本学関係者	放送局・番組(掲載日)
1	サッカーの無回転ボール	浅井武教授(人間総合科学研究科)	テレビ東京:スポーツ夢の大実験(5.18) テレビ朝日:やじうまサタデー(6.5)他
2	アレルギー-発症制御分子の発見	澁谷彰教授(人間総合科学研究科)	NHK:おはよう日本(6.7) テレビ朝日:報道ステーション(6.7)他

イベントカレンダー (7月～9月)

7月

- 2日(金) 夏季休業(～8/31)
- 3日(土) 第2回七夕講演会「宇宙最初の星から月まで」
- 4日(日) TSUKUBA STUDENT FORUM
- 5日(月) 大学院入試「推薦」(～6)
- 6日(火) 合格発表「AC(II期)」
- 7日(水) 入学試験「2学期」
入学試験「編入学」(～8)
- 13日(火) 環境防災学講演会(砂防会館)
- 14日(水) 合格発表「編入学・2学期」
- 17日(土) ビジネス科学研究科法曹専攻
(法科大学院)オープンキャンパス
- 23日(金) 第1学期末卒業式
大学院学位記授与式
- 24日(土) ひらめきときめきサイエンス
「自作の望遠鏡で宇宙を見よう」
人間総合科学研究科スポーツ
健康システム・マネジメント専攻推薦入試
- 25日(日) Tsukuba Summer Institute for
Physical Education and Sport(～31)
- 27日(火) 受験生のための筑波大学説明会(～29)
学校図書館司書教諭講習(～8/6)
- 28日(水) 未来の科学者養成講座
BSリーグ夏の実習(下田)(～30)
- 29日(木) 物理学類体験学習
- 31日(土) ビジネス科学研究科国際経営
プロフェッショナル専攻学位記授与式

8月

- 2日(月) 入学試験「編入学(知識)」(～3)
高校生公開講座「海洋生物学入門」(～5)
- 5日(木) 数学類体験学習
一日体験化学教室
- 6日(金) 第2学期入学式
- 7日(土) 夏休み自由研究お助け隊2010(～8)
- 9日(月) 合格発表「編入学(知識)」
- 17日(火) 大学院入試「8月期」(～20)
- 19日(木) 「生物チャレンジ2010」生物学類(～22)
- 21日(土) 人間総合科学研究科スポーツ
健康システム・マネジメント専攻
及び生涯発達専攻入試(～22)
- 28日(土) 茨城県立高校生対象公開講座(生物学類)



9月

- 1日(水) 第2学期授業開始
- 5日(日) ビジネス科学研究科企業科学専攻入試
- 11日(土) 筑波大学公開講座(生物学類)
- 12日(日) ビジネス科学研究科企業法学専攻入試
- 28日(火) 第1次選考合格発表
「AC(I期)、国際科学オリンピック
特別入試(生物)」





「追越学生宿舎」

学内には、学生宿舎が60棟もあり、その多くは築30年以上が経過しています。中でも早期に改修を必要とする25棟は、2009年度～2013年度の5カ年計画で改修が進められています。写真は、2009年度に改修された、追越学生宿舎（20、21号棟）です。

